

林宮原遺跡 II

— 個人専用住宅建設に伴う発掘調査報告書 —

2004

群馬県吾妻郡長野原町教育委員会

はやし みや はら い せき
林 宮 原 遺 跡 II

— 個人専用住宅建設に伴う発掘調査報告書 —

2004

群馬県吾妻郡長野原町教育委員会

II 植類類目

— 植類類目 —

1912

東京帝國大學農學部



SI02 全景 (古墳時代後期)



SI02 出土土器

序

現在、長野原町は八ツ場（やんば）ダム建設という大事業に全町を挙げて取り組んでおります。その中で、貴重な文化遺産を後世に正しく伝えるべく調査し、保存・活用を行えるよう考えております。

本町では、(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団がダム全体やその関係工事による大規模調査を継続して実施しています。その結果、これまで空白であった時期の遺跡が相次いで確認されています。

今回の林宮原遺跡の調査は個人専用住宅建設に伴う調査であります。

この調査では西吾妻地域で初めてとなる古墳時代後期の住居跡に加えて平安時代の住居跡が検出され、そこから墨書土器や灰釉陶器も出土しています。この調査は長野原町の歴史に新たな1頁を加える大変意義のあるものでした。本書はこれらの調査成果を収録したものであります。

末筆になりますがこの調査を実施するにあたり、関係各位に対し厚く御礼申し上げますとともに、本書が広く活用され文化財の保護に役立つことを願い序文といたします。

平成16年11月

長野原町教育委員会

教育長 金子 宥 巻

例 言

1. 本書は、群馬県吾妻郡長野原町大字林字宮原に所在する林宮原遺跡(2次)の発掘調査報告書である。
2. 調査は個人専用住宅建設に伴う事前調査として、原因者の委託を受けた長野原町教育委員会が実施した。
3. 発掘調査から調査報告書作成に至るまでの調査事業費は、文化財補助事業として、国宝重要文化財等保存整備費補助金・群馬県文化財保存事業費補助金・町費が充てられた。
4. 調査は発掘調査を平成15年4月18日から5月9日迄、整理調査及び報告書作成を平成16年1月13日から平成16年10月30日迄の期間実施した。
5. 本遺跡の出土遺物ならびに図面・写真は全て長野原町教育委員会が保管している。
6. 本書は富田孝彦が編集・執筆した。
7. 調査において以下の項目の一部を委託した。
 - 表土掘削・埋め戻し：吉沢建設
 - 測 量：(株)測研
8. 本書における石器の石質鑑定は飯島静男氏(群馬地質研究会)に依頼した。
9. 発掘調査、整理調査及び報告書作成にあたり、次の方々、団体から御指導・御協力を賜った。(五十音順敬称略)
 - 麻生敏隆・飯島静男・飯田陽一・飯森康広・池田政志・市村勝美・小野和之・小川卓也・神谷佳明・黒岩文夫・斉藤和之・坂寄富士夫・桜岡正信・清水 豊・関 俊明・高橋政充・津金澤吉茂・堤 隆・中里 守・福田貫之・藤巻幸男・松本太郎・水田 稔
 - 群馬県教育委員会・(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
10. 調査組織は次のとおりである。
 - 教 育 長 金子宥巻
 - 課 長 山口伸行
 - 補佐兼係長 樋口 正・白石光男
 - 調査担当者 富田孝彦
 - 調査参加者
市村勝美・市村春二・唐澤美恵子・桜井佳世子・篠原良夫・嶋村和作・萩原 仁

凡 例

1. 本書で使用した地図は1:500「林地区平面図」(建設省関東地方建設局八ツ場ダム工事事務所1988)、1:25,000地形図「長野原」(国土地理院1997)である。
2. 挿図の方位は磁北を示す。
3. 挿図の縮尺については下記の通りであり、各挿図中に示してある。
遺 構 住居跡・・・1/60 カマド・土坑・・・1/30
遺 物 復原土器・・・・・・1/4
土器片・金属器・石器・・・・・・1/3
4. 遺構の略号については以下の通りである。
SI:住居跡 SK:土坑(陥穴含む)
5. 挿図に図示した遺物は、観察表にその内容を記してある。観察表における復原土器の法量は左側から器高、中央が口径、右側が底径を表し、計測数値は推定値を含み()内の数値は現存値、< >の数値は復原値を表す。
6. 土器の色調に関しては、「新版標準土色帖1995年後期版」(編・著小山正忠・竹原秀雄、監修農林水産省農林水産技術会議事務局、色票監修財団法人日本色彩研究所)の色名を参考にした。観察表において外面/内面の順で記した。
7. 遺構・遺物実測図中のスクリントーン・記号は下記の通りである。

遺構



地山



カマド・焼土(炭化物)範囲

遺物



内面黒色処理



施釉



磨面範囲

土器 ● 石器(自然礫含む) △ 金属器 □

目次

巻頭図版	
序	
例言	
凡例	
第I章 調査概要	1
1. 調査に至る経緯	1
2. 調査の方法と経過	1
第II章 遺跡の立地と環境	5
1. 遺跡の位置	5
2. 周辺の遺跡	5
3. 既往の調査	15
4. 基本層序	15
第III章 検出された遺構と遺物	18
1. 竪穴式住居跡	18
2. 土坑	34
3. 遺構外出土遺物	39
第IV章 まとめ	40
遺物観察表	
写真図版	

挿図目次

- | | | | |
|------|----------------------------|------|-----------------------------|
| 第1図 | 遺跡の位置と周辺の遺跡 (S = 1/25,000) | 第15図 | SI04実測図 (S = 1/60・1/30) |
| 第2図 | 遺跡周辺の段丘面分布図 (S = 1/25,000) | 第16図 | SI04出土遺物実測図 (S = 1/3) |
| 第3図 | 基本土層 (S = 1/20) | 第17図 | SI05実測図 (S = 1/60) |
| 第4図 | 調査地点位置図 (S = 1/2,000) | 第18図 | SI05カマド実測図 (S = 1/30) |
| 第5図 | 調査区全体図 (S = 1/200) | 第19図 | SI05遺物出土状況図 (S = 1/60) |
| 第6図 | SI01実測図 (S = 1/60) | 第20図 | SI05出土遺物実測図 (S = 1/4・1/3) |
| 第7図 | SI01カマド実測図 (S = 1/30) | 第21図 | SI06実測図 (S = 1/60) |
| 第8図 | SI01遺物出土状況図 (S = 1/60) | 第22図 | SI06遺物出土状況図 (S = 1/60) |
| 第9図 | SI01出土遺物実測図 (S = 1/4・1/3) | 第23図 | SI06出土遺物実測図 (S = 1/4・1/3) |
| 第10図 | SI02実測図 (S = 1/60・1/30) | 第24図 | SK01~04実測図 (S = 1/30) |
| 第11図 | SI02出土遺物実測図 (S = 1/4) | 第25図 | SK05実測図 (S = 1/30) |
| 第12図 | SI03実測図 (S = 1/60) | 第26図 | SK06・出土遺物実測図 (S = 1/30・1/3) |
| 第13図 | SI03カマド実測図 (S = 1/30) | 第27図 | 遺構外出土遺物実測図 (S = 1/4・1/3) |
| 第14図 | SI03出土遺物実測図 (S = 1/4・1/3) | | |

挿表目次

- | | | | |
|-----|-------|-----|----------------|
| 第1表 | 調査経過 | 第3表 | 林宮原遺跡II出土遺物観察表 |
| 第2表 | 周辺の遺跡 | | |

図版目次

- | | | |
|------|---|---|
| PL.1 | 1.遺跡全景 2.遺跡近景① 3.遺跡近景②
4.遺跡近景③ 5.SI01・SI02 6.SI01
7.SI01カマド検出状況①
8.SI01カマド検出状況② | 4.SI05A カマド検出状況
5.SI05B カマド半截状況
6.SI06 7.SI06掘り方 8.SI06カマド半截状況 |
| PL.2 | 1.SI01カマド半截状況 2.SI01カマド完掘状況
3.SI01貯蔵穴 4.SI01遺物出土状況①
5.SI01遺物出土状況② 6.SI02
7.SI02カマド半截状況①
8.SI02カマド半截状況② | PL.5 1.SI06カマド 2.SI01遺物出土状況 3.SK01
4.SK02 5.SK03 6.SK04 7.SK05 8.SK06 |
| PL.3 | 1.SI02遺物出土状況 2.SI03
3.SI03カマド半截状況①
4.SI03カマド半截状況②
5.SI03カマド半截状況③
6.SI04カマド半截状況①
7.SI04カマド半截状況② 8.SI04カマド完掘状況 | PL.6 1.社会科学習① 2.社会科学習② 3.調査風景
4.てつか 5.SI01出土遺物
PL.7 1.SI02出土遺物 2.SI03出土遺物
3.SI04出土遺物
PL.8 SI05出土遺物
PL.9 1.SI06出土遺物 2.SK06出土遺物
3.遺構外出土遺物 |
| PL.4 | 1.SI05 2.SI05B カマド 3.SI05貯蔵穴 | PL.10 墨書土器赤外線写真①
PL.11 墨書土器赤外線写真②
PL.12 墨書土器赤外線写真③ |

第I章 調査概要

1. 調査に至る経緯

平成15年3月下旬に施主である中里守氏より個人専用住宅建設の計画が示され、埋蔵文化財の取り扱いについて、長野原町教育委員会社会教育課に照会があった。対象地は周知の包蔵地「宮原遺跡(No.48)」の範囲内に含まれていることから試掘調査の必要がある旨を説明し、調査実施で合意を得た。文化財保護法第52条第1項の規定により、同年4月9日付け長教社第13号で長野原町教育委員会を經由して施主より群馬県教育委員会教育長へ「埋蔵文化財発掘の届出」が提出された。また同日付けで施主より長野原教育委員会教育長へ「開発に伴う文化財調査願書」が提出された。同年4月15日付け文第802-9号で群馬県教育委員会教育長より施主に通知された事前の発掘調査の指示に基づき、同年4月17日に教育委員会文化財担当立会のもと、対象地内の住宅建設予定範囲に3本の試掘坑(トレンチ)を設定して、遺構の有無および土層の堆積状況の事前確認を行った。その結果、平安時代住居跡が検出され、長野原町教育委員会としては、埋蔵文化財の保護に理解・協力してほしい旨を施主に伝えた。協議の結果、工事計画の変更が困難であるため、継続して発掘調査を実施することとなった。なお、埋蔵文化財包蔵地の改訂に伴い、宮原遺跡は平成16年4月1日付けで「林宮原遺跡」と名称を変更した。

2. 調査の方法と経過

(1) 発掘調査

a. 表土除去

表土除去は重機(バックホー)を使用して行った。試掘調査で遺構の掘り込み面が黒色土中であることが判明していたので、そのことを念頭に表土から遺構確認面まで少しずつ掘り下げていった。カマドの焼土混じりの粘土が散見される面までを重機でそれ以下は人力で除去したが、遺構面が検出されない場合は地盤である関東ローム層まで下げて確認した。また、重機のバケットの爪に鉄板を溶接して遺構を傷つけないように配慮した。

b. 遺構確認

遺構確認は上述の表土除去後に人力で行った。住居跡は確認面での覆土の識別に努め、平面形を確定していった。確認面が黒色土層中ということもあり作業は困難な側面もあった。

c. 基準杭の設定

調査区全体を網羅するように国家座標IV系に準拠した5×5mの基準杭(グリッド)を設定し、測量作業の基準とした。また、調査区内に標高値を落とし込んだ任意の杭を設定し、土層堆積状況断面図や遺物出土状況図作成の際の基準とした。

d. 遺構発掘及び遺物の取り上げ

遺構の発掘作業は、遺構の平面形を確定した上で土層観察用のベルトを設定し、遺構内の覆土の除去に着手した。住居跡の場合は長軸方向とその中心から長軸に対して直交方向に十字にベルト設定し、土坑の場合は長軸に沿って半截して土層の観察を行った。

遺物の取り上げについては、単独と思われる破片は上層・下層・床面直上ごとに、個体もしくは遺物

の集中している箇所に関しては出土位置図（ドット図）を作成の上、取り上げ作業を行った。遺物出土位置図は1/10のスケールで作成し、標高値の記録を一点ずつ行った。

e. 実測図の作成及び遺構の写真撮影

実測図は土層堆積状況図、遺物出土位置図及び完掘状況遺構平面図を作成した。土層堆積状況図は遺構が小規模であったので遺物出土位置図と同様に1/10のスケールで作成した。完掘状況遺構平面図は光波測距儀を用いて行った。完掘遺構の変化点を三次元記録し、その場でパーソナル・コンピューターにより現地での詳細な観察の上で結線し作成した。また、土層堆積状況図及び遺物出土状況(位置)図のポイントの位置も完掘状況遺構平面図作成時に記録した。測定したデータは公共座標値に変換後、加工・編集を行いフロッピーディスク等に保管した。

遺構の記録写真は土層断面、遺物出土状況、完掘状況の順で撮影を行った。カメラは一眼レフを用い、モノクロとカラーライドの2種類のフィルムを使用した。フィルムサイズは35mmである。

(2) 調査経過

a. 発掘調査

発掘調査は平成15年4月17日から5月9日にわたって実施された。

4月17日、試掘確認調査、試掘坑3本を設定し、平安時代住居跡を検出。継続して、住宅建設予定地を重機により表土除去。

4月18日、重機による表土除去。これと併行して表土除去部を順次ジョレンがけ、遺構確認作業を行う。住居跡6軒・土坑を検出する。

4月21日、引き続きジョレンがけ。SI01・02にサブトレを入れ、01→02の構築順を確認。ベルトを設定して掘り下げ開始。SI01は焼失住居であることが判明。SK01半裁。

4月22日、SI01のセクション写真、図面作成。SI03・04にサブトレを入れるが新旧不明。

4月23日、SI01のベルト外し。遺物出土状況写真。SI01内に土坑(SK05)を確認。SI02は掘り下げほぼ完了。SK01は完掘。SK02は掘り下げ途中。SK03・04は半裁、写真。調査区東壁から数点の鉄滓出土。

4月24日、SI02のセクション写真・図面作成。SI03は平面プラン不明。SI04・05にサブトレを入れ、04→05構築順を確認。SI05内に土坑(SK06)を確認。SI04覆土中より独鈷石出土。

4月25日、調査区壁精査。SK06範囲確認。

4月28日、SI01遺物出土位置図作成、取り上げ、木炭・焼土範囲作図、サンプル採取。SI02セクション図作成、ベルト外し。SI06は掘り下げ途中。SK01～06は平面図・セクション図作成、完掘写真。

5月1日、SI01・02完掘写真。SI01カマド断ち割り途中。応桑小6年生社会科学習「体験発掘」。引率2名、生徒11名。

5月2日、SI01・02カマド断ち割り・セクション図・写真。遺物取り上げ。SI03は貼床範囲確認、写真、平面図作成。カマド断ち割り途中。SI03・06セクション図作成・遺物取り上げ。SI04カマド平面図作成。SI05は掘り下げ開始。

5月6日、SI03カマド断ち割り、セクション図作成・完掘・写真。SI05は掘り下げ・セクション写真。SI06は貼床確認。

5月7日、SI01・02はカマドセクション図作成・写真・完掘・平面図作成。SI03・04はカマドセクション図作成・写真。SI05は床・壁確認。カマドセクション図作成・写真。SI06は遺物出土状況写真、遺物取り上げ。セクション図付け足し。掘り方途中。

5月9日、SI03・04カマド完掘・写真・平面図作成。SI05カマド完掘・写真。柱穴・周溝など完掘、平面図作成。SI06完掘・平面図作成。全体清掃で全景撮影。平面図付け足し。撤収。

b. 整理調査・報告書作成

発掘調査によって得られた遺物はテンバコで4箱分、現場で作成した図面類は40枚程度であった。その他の立会・試掘調査や社会教育課の事業の合間を見て担当と作業員2名で作業を進めていくことになった。

遺物洗浄・注記作業は5月29日～6月30日までの約1ヵ月を費やした。これと併行して遺構図面の修正、遺構写真の整理を行った。

11月3・4日には長野原町の文化祭で「宮原遺跡II発掘調査速報展」と題して出土遺物や写真パネルの展示を実施した。

遺物の接合作業及び石膏による復原作業は1月14日～3月8日までの約2ヶ月間を費やし、報告書に掲載する遺物をほぼ確定した。これと併行して遺物の実測・拓本・トレースを行った。

3月9日～3月30日までは遺構図のトレースを行った。

版下作成は6月1日～7月30日までの2ヶ月間を費やした。

遺物写真は8月上旬に完了した。また石質鑑定を飯島静男氏に依頼して行った。

編集作業は10月上旬までに仮割付を行い、執筆作業は9月～10月中旬にかけて行った。併せて保管用に資料・遺物の整理をして10月30日、全ての作業を完結した。

第1表 調査経過

		H15年 4月	5月	6月	H16年 1月			2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月
発掘調査	査		—													
	掘			—												
遺物	洗浄・注記			—												
	接合・復原						—									
	実測・拓本						—									
	トレス						—									
	版下作成										—					
遺構	写真撮影												—			
	写真図版作成													—		
	原図整理			—												
	トレス									—						
	版下作成											—				
原稿	写真図版作成													—		
	遺物観察表														—	
	本文														—	
編集・資料整理	分析委託															—
	資料整理															—

第II章 遺跡の立地と環境

1. 遺跡の位置

林宮原遺跡が所在する長野原町は群馬県の北西部、吾妻郡の南西隅に位置し、「鶴舞う形の群馬県」と上毛かるたに読まれている鶴の尾部下端にあたる。北部は高間山(標高1,341m)・本白根山(標高2,171m)の両山系からなり吾妻川流域沿いに東西に延びている。南部は浅間山(標高2,568m)の裾野に広がる浅間高原地帯を経て長野県に接している。林宮原遺跡は北部の吾妻川流域地帯に属し、吾妻川左岸の河岸段丘上に立地する。また遺跡の対岸には岩峰「丸岩」がそびえている。丸岩は南側を除く3方が100mにも達する垂直な岩崖に取り囲まれ、吾妻川方面から臨むと見事な節理とその巨大な円柱状の独特な景観は太古から当該地域のランドマークとしての要素を備えている。

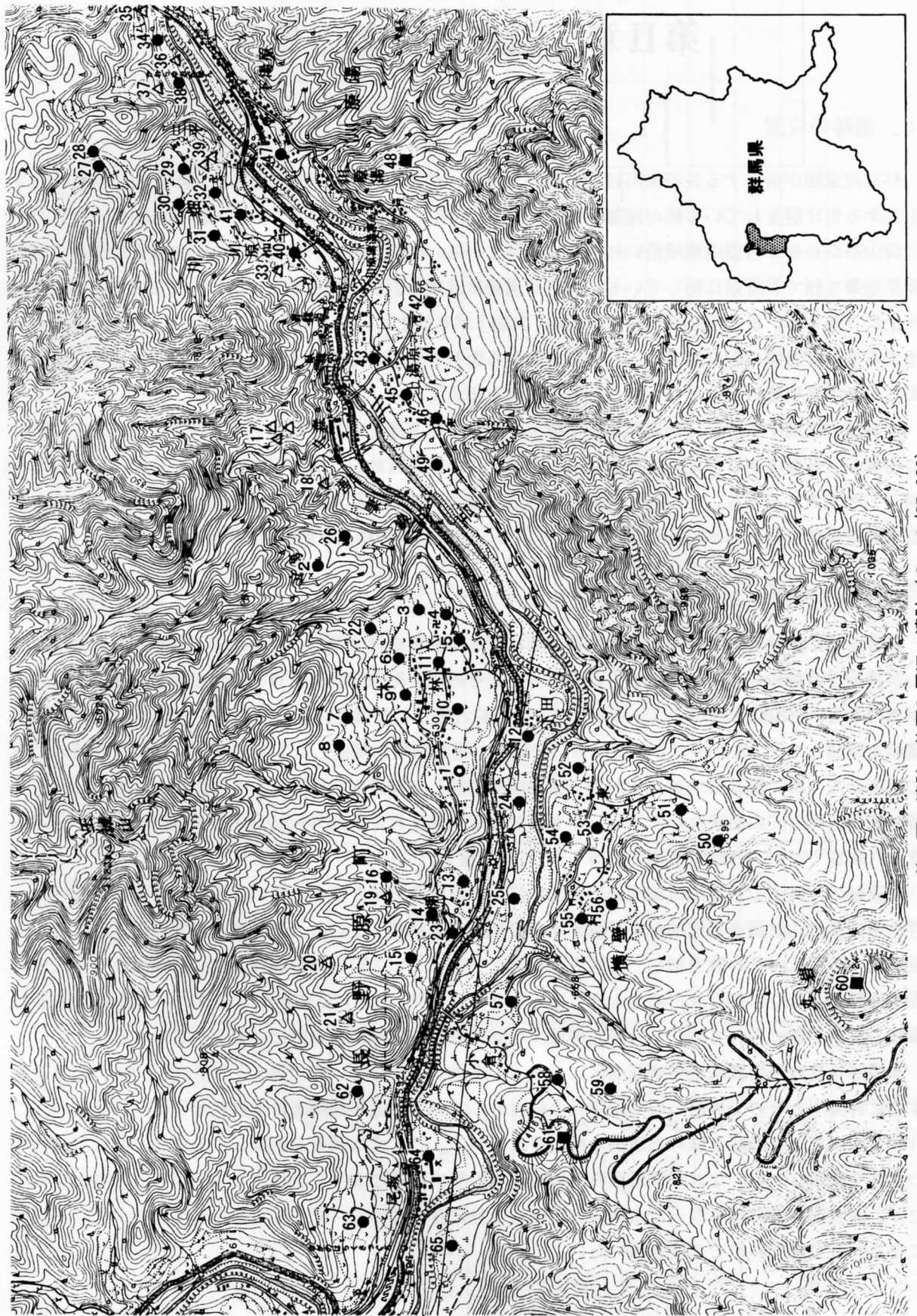
本遺跡の立地する段丘は吾妻川から下位・中位・上位・最上位の4段からなる河岸段丘の最上位段丘に相当し、吾妻川からの比高差は約80mを測る。この段丘は約21,000年前に噴出した応桑泥流堆積物を削って形成されている。その上に重なっている関東ローム層中には約11,000年前に噴出したと考えられる浅間草津黄色軽石層が1.2m以上堆積している。調査地点の標高は約621mである。

2. 周辺の遺跡

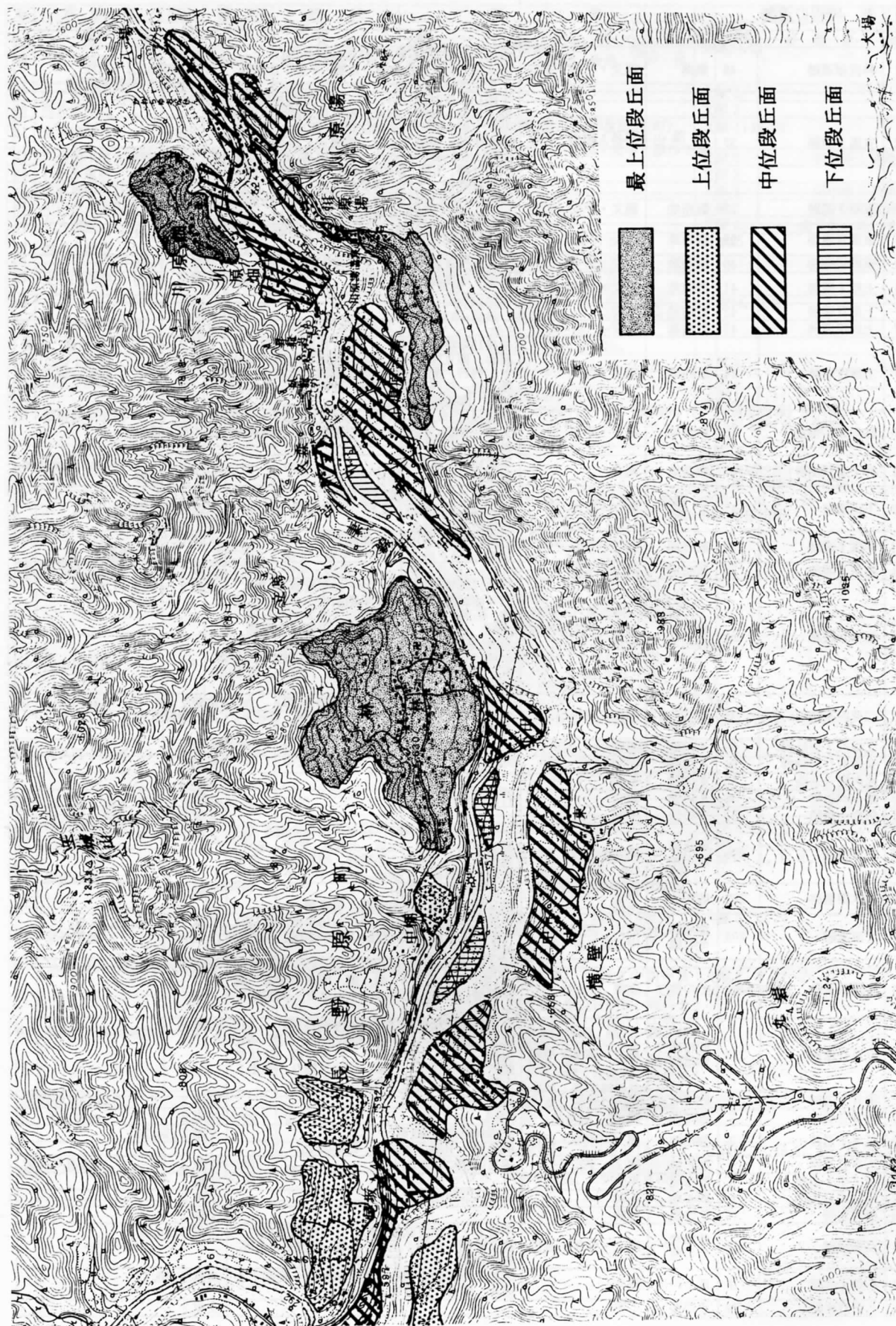
長野原町における遺跡分布状況は昭和48年に群馬県教育委員会刊行の『群馬県遺跡地図』に依っていたが詳細な遺跡の分布の把握は不十分であった。その後、町教育委員会は県教育委員会文化財保護課の指導のもと、昭和62年度から3ヶ年かけて、全町を対象とした遺跡詳細分布調査を実施し、199の遺跡包蔵地を確認した⁽¹⁾。また平成6年度から八ツ場ダム建設事業に関連した工事用進入路や水没地域の工事に対応して(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団が継続して調査を実施しており、新たな包蔵地の発見や遺跡名の変更などの必要性から平成14年3月と平成16年4月に遺跡地図の改訂を実施した⁽²⁾。平成16年度4月現在で214の包蔵地(指定史跡等を含む)が把握されている。

本遺跡の位置する吾妻川流域地帯の東部地区はダム関連事業と直結している地域で、先述した(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団が常時数カ所の発掘調査を継続している。近年は水没地域住民による非水没地域への移転がその数を増し、町教育委員会で実施している町内遺跡調査の調査原因のうち個人専用住宅建設がかなりの割合を占めるようになってきている⁽³⁾。さらにこの地域でのダムに関連した町単独事業の計画が進められており、今後も埋蔵文化財に係わる調整が重点的に必要な地域である。

本遺跡を含む吾妻流域地帯東部地区には多くの遺跡が分布している(第1・2図・第2表)。遺跡は基本的に吾妻川とその支流沿いの河岸段丘上に占地しているが近年丘陵上にも遺跡が発見されはじめ、これまで空白だった時期を埋める遺構も検出されている。ここでは調査を実施した遺跡を中心に当該地域の遺跡を概観したい。なお、長野原町の現時点での歴史観をなるべく記載する立場から、筆者が実見したり、調査担当者に聞き取った未報告の情報を多分に含んでいる。従って本報告時には多少異なる見解になるかもしれないのでご注意願いたい。



第1図 遺跡の位置と周辺の遺跡 (S = 1/25,000)



第2図 遺跡周辺の段丘面分布図 (S = 1/25,000)

第2表 周辺の遺跡

No.	遺跡名	町No.	種別	時代	概要	備考
1	林宮原遺跡	48	集落	縄文・古墳・平安	平成14年度試掘(町)、15年度調査(町) 縄文中・後期：包含層。古墳・平安：住居跡。 平安：土坑を検出。	文献1, 2, 6 「県遺跡地図」No.3127。 旧宮原遺跡(神社前遺跡)
2	立馬I遺跡	37	集落、 墓その他	縄文・弥生・平安 中世・近世	平成13年度試掘(事)、13・14年度調査(事) 縄文早期～後半：陥穴、竪穴住居跡(早期擦 糸文土器を伴う)、前期住居跡、縄文包含層(押 型文土器、条痕文土器、諸磯式土器を出土)。 弥生：住居跡、土器片、土器棺墓。平安：竪 穴住居跡、土坑、鉄製紡錘車、陥穴。中近世： 掘立柱建物、土坑、溝を検出。	文献1, 2, 24, 25
3	東原I遺跡	38	散布地	縄文・平安・近世	平成7・9年度試掘(事) 縄文前期～中期後 半：陥穴、土器片を検出。	文献2, 20, 21
4	東原II遺跡	39	散布地	縄文	平成10年度調査(事) 縄文後期：土器片、黒 曜石片出土。	文献2, 15, 21
5	東原III遺跡	40	散布地	平安・近世	平成9年度試掘(事)、15年度試掘(町)	文献2, 7, 20
6	上原I遺跡	41	散布地	縄文・平安・近世	平成9年度試掘調査(事) 縄文：土坑？検 出。	文献2, 14, 20
7	上原II遺跡	42	散布地	平安		文献2
8	上原III遺跡	43	散布地	平安		文献2
9	上原IV遺跡	44	散布地	縄文・江戸	平成15年度調査(事) 縄文後期～晩期：住 居跡、掘立柱建物、土坑、竪穴状遺構、ピット、 列石、配石遺構、焼土遺構、土器片、石 棒大片。江戸：溝、下駄、曲物の底、農具、 石鉢、陶磁器を検出。	文献2, 6, 26 市村春二氏蔵
10	林中原I遺跡	45	散布地	縄文・平安	平成14・15年度試掘(町)、15年度調査(町) 縄 文前～後期：住居跡、配石遺構、石組遺構を 検出。	文献2, 6, 7 旧中原I遺跡
11	林中原II遺跡	46	散布地	縄文	平成15年度試掘(町) 縄文前～中期：土器片出土。	文献2, 7 浦野久女子氏蔵 旧中原I遺跡
12	下田遺跡	47	集落、 その他	縄文・近世	平成6・7・9年度試掘(事) 縄文：土坑。陥穴。江戸：段状遺構、住居跡、 畑を検出。	文献2, 14, 20 「県遺跡地図」No.3126。 旧下原(下田)遺跡
13	中棚I遺跡	49	散布地	縄文・平安	平成11年度(事)縄文：黒曜石片、チャート片 出土。	文献2, 14 旧中棚遺跡
14	榎木I遺跡	50	散布地	縄文・平安		文献2 星河義一氏蔵
15	榎木II遺跡	51	集落跡、 散布地	縄文・平安・中世 近世	平成11年度試掘(事)、12・13年度調査(事)、 12年度試掘(町) 縄文早期前半～中期：住居 跡、石囲い炉、打製石器、スタンプ形石器、 土坑、ピット、溝、土器片。平安：住居跡、 羽釜、高台付碗、灰釉陶器、墨書土器、刀子、 土坑、ピット。中世：掘立柱建物の柱穴、土 坑、土坑墓。近世：湧水遺構、ピット、溝を 検出。	文献2, 4, 13, 14, 23, 24
16	二反沢遺跡	52	社寺、 その他	中世・近世	平成11年度試掘(県)、12年度調査(事) 中世：石垣、段造成跡、区画、土坑、ピット。 近世：畑、溝を検出。	文献2, 20 旧大乘院堂跡
17	久森沢I岩陰群	53	その他	不明		文献2
18	久森沢II岩陰群	54	その他	不明		文献2
19	滝沢観音岩陰	55	その他	不明		文献2
20	蜂ヶ沢岩陰	56	その他	縄文	打製石斧出土。	文献2
21	御嶽山岩陰	57	その他	不明		文献2
22	花畑遺跡	205	集落跡、 散布地	縄文・平安	平成10年度試掘(事)、10年～12年度調査(事) 縄文前期～後期：土坑、土器片、石器、陥穴、 風倒木、溝。平安：住居跡、須恵器碗、墨書 土器、土師器片を検出。	文献2, 14, 21～23
23	榎木III遺跡	202	散布地	縄文・弥生・平安 中世	平成10年度調査(事) 縄文前～後期、弥生中期：包含層	文献14
24	下原遺跡	204	集落跡、 その他	縄文・平安 中近世	平成12年度試掘(県)、12・13・15年度調査(事) 平安：住居跡、竈。江戸：畑、水田、住居を 検出。	文献2, 14, 16, 23, 24, 26
25	中棚II遺跡	203	その他	近世	平成11・12年度試掘(県)、11～13・15年度調 査(事) 江戸：畑、溝、円形平坦面、溝 状遺構(道か)、石積み、ヤックラ、陶磁器片 を検出。	文献2, 16, 19, 22～24, 26
26	立馬II遺跡	213	散布地、 集落跡	縄文・弥生・平安	平成14年度試掘(県)、14年度調査(事) 縄文中期前半：住居跡、竪穴遺構、石囲い炉、 土坑、土器、土製耳飾り、打製石鏃、扶状耳 飾り、磨製石斧、石錐、扶状耳飾り。弥生： 土坑。平安：土坑(陥穴か)を検出。	文献25
27	温井I遺跡	1	散布地	縄文・平安	縄文後期。	文献2 中島邦太郎氏蔵
28	温井II遺跡	2	散布地	縄文	中期。	文献2
29	三平I遺跡	3	散布地	縄文・平安・近世	平成10年度試掘(県) 縄文前・中期：土器片、石器出土。	文献2, 14, 21
30	三平II遺跡	4	散布地	縄文・平安	縄文中期：石斧出土。	文献2 中島運平氏蔵
31	上ノ平I遺跡	5	散布地	平安		文献2
32	上ノ平II遺跡	6	散布地	不明	チャート片出土。	文献2
33	西宮岩陰	13	その他	不明		文献2
34	石畑遺跡	210	散布地、 その他	縄文・弥生・近世	平成8・9年度試掘(事)、10年度調査(事) 縄文前期～中期：土器、石器、埋没谷、土坑。 弥生後期：土坑。江戸：畑を検出。	文献2, 14, 20
35	石畑I岩陰	9	墓その他	縄文	昭和53年度調査(県) 縄文草創期～晩期：土 器片、獣骨、人骨などを出土。	文献2, 10, 12
36	石畑II岩陰	10	その他	不明		文献2

No	遺跡名	町No	種別	時代	概要	備考
37	二社平岩陰	11	その他	不明		文献2
38	二社平遺跡	209	散布地	縄文・平安・近世	平成6・8・10年度試掘(事) 縄文：土器片、石器。平安：土師器、鉄滓。江戸：浅間A軽石を出土。	文献14,21
39	三ッ堂岩陰	12	その他	不明		文献2
40	西宮遺跡	7	散布地	縄文	中期。	文献2
41	東宮遺跡	208	その他	近世	平成7・9年度試掘(事)、12年度試掘(町) 江戸：畑、陶磁器、獣骨、浅間A軽石を出土。	文献4,14,20
42	川原湯中原I遺跡	16	散布地	縄文	チャート片出土。	文献2 旧中原I遺跡
43	石川原遺跡	17	散布地	縄文		文献2
44	川原湯中原II遺跡	18	散布地	縄文		文献2 旧中原II遺跡
45	川原湯中原III遺跡	19	散布地	縄文・平安	縄文中期：チャート片出土。	文献2 旧中原III遺跡
46	北入遺跡	20	散布地	縄文	チャート片、石英出土。	文献2 金子新二郎氏蔵
47	西ノ上遺跡	212	その他	近世	平成14年度試掘(県)、14年度調査(事) 江戸：畑、円形平坦面、道を検出。	文献25
48	金花山砦跡	207	城館跡	中世	平成12年度踏査(町・事) 明治期の「川原湯真図」に「トリデアト」の記載あり。	
49	川原湯勝沼遺跡	206	散布地、その他	縄文・平安・近世	平成15年度試掘(県)、9・15年度調査(事) 縄文前期・後期：縄文土器片。平安：住居跡、掘立ビット、焼土。江戸：畑、ヤックラ、道、溝、平坦面(堆肥置き場か)を検出。	文献14,20,26
50	上野I遺跡	21	散布地	縄文・平安		文献2
51	上野II遺跡	22	散布地	縄文・平安		文献2
52	横壁勝沼遺跡	23	散布地、集落跡、墓その他	縄文・弥生・平安中世・近世	平成6・7年度調査(事) 縄文：陥穴。弥生：土器片。平安：住居跡。近世：土坑墓、土坑、集石跡、溝、チャート片を検出。	文献1,2,14 『県遺跡地図』No3118。 旧勝沼遺跡(東平遺跡)
53	山根I遺跡	26	散布地	平安		文献1,2 『県遺跡地図』No3118。 旧山根I遺跡(中村遺跡)
54	横壁中村遺跡	24	集落跡、墓その他	縄文・弥生・平安中世・近世	平成8～15年度調査(事) 縄文前期～晩期終末：住居跡、土坑、集石、配石、列石、掘立柱建物、環状柱穴列、埋甕、包含層、ビット、河道。埋設土器遺構。柄鏡型住居。立石を伴う配石遺構。弥生：土坑(再葬墓か)。平安：住居。石組カマド。中世：館。中近世：掘立柱建物、石垣、墓、焼土、礎石建物、土坑、土坑墓、方形区画、畑。近世：掘立柱建物、石垣、墓、礎石建物、石組遺構、鍛冶跡、寛永通宝、木製曲物を検出。	文献2,16,19～26 旧上野III遺跡
55	山根III遺跡	29	集落跡、散布地	縄文・弥生・平安近世	平成9年度試掘(事)、10年度調査(事) 縄文前期前半～後期前半：土器片、石器、住居跡、埋甕、石囲い炉、土坑。弥生中期：土器片。平安：土器片を検出。	文献2,14,21
56	山根IV遺跡	30	散布地	縄文・平安	縄文中期：チャート片出土。	文献2
57	西久保I遺跡	31	集落跡、散布地	縄文・弥生・平安中世・近世	平成6～9年度試掘(事)、10～12年度調査(事) 縄文前期～中期末：住居跡、水場遺構、水場土坑、剥片廃棄場、土坑。弥生・平安・中近世：礎石建物、土坑、溝、ビット。江戸：浅間A軽石を検出。	文献2,14,21～23
58	西久保II遺跡	32	散布地	平安		文献2
59	西久保III遺跡	33	散布地	不明		文献2
60	丸岩城跡	34	城館跡	中世		文献1,2,8,9
61	柳沢城跡	35	散布地、城館跡	旧石器・縄文中世	平成4・5年度調査(町) 旧石器：スクレイパー。中世：郭跡、堀切、土居、礎石、腰曲輪、石組遺構、溝、陶磁器、鉄製品、銅製品、石臼を検出。	文献1,2,3,8,9,12
62	幸神遺跡	62	集落跡、その他	縄文・平安・近世	平成8・9年度調査(事) 縄文早期後半：土器片。縄文中葉～後葉：土坑、住居跡、埋甕炉、石囲い炉、埋没谷、包含層。平安：畑、近世：溝、倒木を検出。	文献2,19,20
63	長野原一本松遺跡	63	集落跡、散布地	縄文・弥生・古墳平安・中世・近世	平成6～15年度調査(事) 縄文中期中葉～後半：住居跡、土坑、柱穴列、列石、配石、埋甕、ビット、包含層、掘立柱建物、埋設土器、集石、配石遺構。弥生：土器片、土坑。古墳：土器片。平安：住居跡、陥穴、掘立柱建物、配石、列石遺構、土坑、ビット、炉跡、焼土跡。中近世：土坑、溝、ビット、竪穴状遺構、柵列、ヤックラ、掘立柱建物、炭化柱材、焼土、茶臼、土器片、筒型銅製品を検出。	文献1,2,17～26 旧一本松遺跡
64	尾坂遺跡	201	その他	近世	平成6・7年度試掘(県)、11年度調査(事) 江戸：畑、土屋を持つ構造物、溝、円形平坦面、石垣を検出。	文献14,22
65	久々戸遺跡	200	散布地、その他	縄文・近世	平成6・7年度試掘(県)、7・9～12・14・15年度調査(事) 江戸：畑、掘立柱建物、道、ヤックラ、円形平坦面、天明泥流堆積物、浅間A軽石を検出。	文献12,13,16,18,20～23,25,26

(1) 旧石器時代

これまでのところ長野原町では旧石器時代に遡る遺跡は確認されていない。柳沢城跡(61)で遺構外ながら細石器文化に伴うと考えられる珪質頁岩製のスクレイパーが1点出土しているのみである。西吾妻地域はもとより吾妻郡内でも旧石器時代は高山村に所在する新田西沢遺跡⁽⁴⁾でしか確認されていないのが現状である。

(2) 縄文時代

縄文時代になると遺跡数も膨大となる。吾妻川沿岸の下位は低調だが主として中・上・最上位河岸段丘および丘陵部に集落が展開する。

①草創期～早期

現在のところ、長野原町で人々の生活が確認されているのは草創期末～早期初頭からである。該期の遺跡として石畑 I 岩陰(35)がある。昭和53年に群馬県教育委員会により一部調査され、中期を除く草創期～晩期の土器片・獣骨・人骨などが出土している。特に草創期～早期の土器片には表裏縄文・押型文・撚糸文が認められる。近年、丘陵上での調査機会も増え、楡木 II 遺跡(15)、立馬 I 遺跡(2)で早期の集落が検出されている。楡木 II 遺跡では平成12・13年度の調査で早期前半撚糸文期の住居跡が37軒検出され、遺構外で表裏縄文・押型文・沈線文・条痕文土器片も出土している。該期の住居跡検出数では県はもとより全国的にも有数である。また立馬 I 遺跡では撚糸文期の住居跡1軒の他、沈線文(田戸下層式)期の住居跡2軒が検出され、遺構外では押型文・条痕文をはじめ弥生後期までの土器片が連綿と出土している。それまでの岩陰での生活から早期前半撚糸文期になると丘陵上のオープンサイトでの集落に移行していくようである。また石畑 I 岩陰に代表される岩陰遺跡は丘陵部の自然に迫り出した岩場を利用して居住・墓域とするものであるため、県内では分布・遺跡数ともに限定される。吾妻川流域はそのほとんどが河川や溪沢に沿う山岳傾斜地帯であることから岩陰遺跡の立地する条件を満たしているといえよう。岩陰遺跡は長野原町域で21ヶ所確認されており、その大半がこの東部地区に集中している。この岩陰遺跡の多さは本町の縄文時代遺跡の大きな特徴の一つでもある。今後、ダム関連工事で岩陰遺跡の調査は不可避で、該期の様相も徐々に明らかとなるであろう。

②前期

前期の遺跡も少なく、後半の住居跡は未だ検出されていない。立地は丘陵上が多いが、河岸段丘へも集落が広がる傾向が見受けられる。前期前半の遺跡は東部地区より西部地区で顕著である。坪井遺跡で前期初頭(花積下層式期)の住居跡と土坑が検出され、土坑内で花積下層式と長野県で主体的な塚田式との共伴が確認された⁽⁵⁾。暮坪遺跡では前期前葉(二ツ木式期)の住居跡⁽⁶⁾、長畝 II 遺跡では前期前葉(関山式期)の土坑と前期前葉(黒浜式期)の住居跡・土坑が検出されている⁽⁷⁾。東部地区では楡木 II 遺跡(15)で前期前葉(黒浜式期)の住居跡7軒が検出されている。前期後半は川原湯勝沼遺跡(49)で前期後葉(諸磯式期)の土坑、立馬 I 遺跡(2)で集石遺構が検出されている以外は遺構外の出土である。

③中期

中期の遺跡は他時期に比して最も多い。前半は未だ少なく、丘陵上に占地しているようである。後半になると河岸段丘の平場を中心として積極的な居住区域を展開している。これまで中期前半の集落は未検出であったが、近年丘陵上の遺跡で発見されはじめている。中期初頭(五領ヶ台式期)の遺跡は楡木 II 遺跡(15)で住居跡2軒が確認されているのみである。中期前葉(阿玉台式期)の遺跡は立馬 II 遺跡(26)で

住居跡12軒・竪穴遺構7基、幸神遺跡(62)で土坑が検出されている。西久保I遺跡(57)では中期中葉(勝坂式期)の土坑が確認されている。中期中葉(焼町類型期)の遺跡は幸神遺跡(62)で焼町土器の深鉢を炉体土器とした住居跡、横壁中村遺跡(54)では焼町土器を主体とする住居跡がそれぞれ1軒ずつ確認されている。中期前半はその立地から現時点では東部地区のみの検出である。中期後半になると列石を伴う拠点集落が吾妻川流域地帯に分布を広げて出現する。長野原一本松遺跡(63)、横壁中村遺跡(54)、西部地区では坪井遺跡に代表される。遺跡を大規模に調査している前2者に共通するのは中期後半に引き続き、後期前半(～加曾利B式期)まで継続して集落が営まれていることである。また坪井遺跡は前2者に比して規模は小さいが、弧状石列1基、住居跡19軒(拡張住居含む)、土坑49基が検出されている⁽⁸⁾。土器は大きく4系統(①加曾利E式土器<北関東系>、②曾利・唐草文系土器<信州系>、③「郷土」式土器<①と②の融合型式>、④枋倉II式土器<越後系>)が認められ、特に③の「郷土」式土器が該期の主体となる時期であり、環浅間山地域に分布し、小文化圏を形成していることが最近分かってきている。この坪井遺跡出土土器の傾向は前2者出土土器、さらに県指定史跡「勘場木石器時代住居跡」出土土器にも看取される。その他、向原遺跡では中期末～後期初頭の敷石住居跡が検出されており、立地から拠点集落のひとつになる可能性が高い。

④後期

後期の遺跡は規模は縮小するものの吾妻川流域の比較的広い範囲に分布する。ただし遺構の検出は後期前半までで後半は不明である。上記の中期後半の遺跡の他、本町で初めて敷石住居跡を検出したクヌギII遺跡⁽⁹⁾・向原遺跡⁽¹⁰⁾、東部地区では上原IV遺跡(9)、林中原I遺跡(10)に代表される。後期初頭(称名寺式期)～後期中葉(加曾利B式期)までの敷石住居跡、掘立柱建物跡は長野原一本松遺跡(63)、横壁中村遺跡(54)で多く検出されている。長野原一本松遺跡では平成14年度の調査で壁に板材の痕跡を遺す柄鏡形敷石住居跡、平成16年度の調査では方形周礫を明瞭に遺す柄鏡形敷石住居跡を確認している。また横壁中村遺跡では主軸全長9mにも及ぶ大形の柄鏡形敷石住居跡や30基程の配石墓群が検出されている。その他上原IV遺跡、林中原I遺跡は平成15年度の調査で後期前葉(堀之内式期)の敷石住居跡等が検出されている。後期後葉(高井東式期)～晩期前葉(安行式期)に関しては横壁中村遺跡や立馬I遺跡(2)で土器片が出土しているがいずれも遺構外である。

⑤晩期

晩期に関してはこれまで石畑I岩陰(35)で土器片が出土している他、横壁中村遺跡(54)で晩期末葉(千網式併行)の包含層が確認されているだけであった。遺構の検出は晩期前半は依然ないものの後半(特に末葉～弥生中期)に関しては最近の調査で増えつつある。立馬I遺跡(2)では平成14年度の調査で晩期末葉の住居跡1軒、横壁中村遺跡(54)では平成15年度の調査で晩期末葉の住居跡2軒、上原IV遺跡(9)では土坑1基が検出されている。立馬I遺跡では住居跡から南信松本盆地に分布する女鳥羽川式土器が出土している。その他、遺構外ではあるが向原遺跡で大洞A'式まで遡ると考えられる土器片も確認されている。

(3) 弥生時代

弥生時代の遺跡は分布調査で後期に属する3遺跡のみであったが、縄文時代晩期末葉から弥生中期前半までの資料が増えてきている。遺跡は丘陵上に立地する傾向が強く、縄文時代早期や中期前半と共通

しているようである。立馬 I 遺跡(2)で前期の住居跡 1 軒、中期後半の土器棺墓 2 基を含む土坑が数基、長野原一本松遺跡(63)では中期前半までと考えられる土坑 1 基、横壁中村遺跡(54)では埋甕 1 基が検出され、東海地方に分布する檜王式土器の甕が出土している。川原湯勝沼遺跡(49)からは平成16年度の調査で該期の土坑が数基検出され、その中の 1 基は壺棺再葬墓であることが判明している。同一土坑に 2 個体が埋置されており、ひとつが中沢氏のいう「氷式突帯壺」⁽¹¹⁾の上半部が逆位に、もう一方は浮線文系の半精製甕が正位の状態で出土している。この壺棺再葬墓は東日本でも最古級として注目されよう。また遺物出土量が少なく、時期が判然としないものが多いが、坪井遺跡でも中期と考えられる土坑が 1 基、向原遺跡では前期に遡るものも含めて中期前半までの土坑が 7 基確認されている。遺構外では外輪原 I 遺跡、上ノ平遺跡で中期前半までの資料が比較的まとまっている⁽¹²⁾。後期に関しては未だ少なく、石畑遺跡(34)で土坑 1 基が確認されているのみである。分布調査時に居家以岩陰群、寺久保遺跡、新田原 I 遺跡で土器片が表採されている他、下原遺跡(24)や立馬 I 遺跡(2)では遺構外で、二社平遺跡(38)周辺で後期～古墳時代前期に比定される土器片が表採されている。

(4) 古墳時代

これまで遺構外では他時期の遺物に混入するかたちで 5 世紀後半の土器片は坪井遺跡、長野原一本松遺跡(63)、二社平遺跡(38)などで確認されてきたが、長野原町で古墳時代の集落として把握されている遺跡は皆無であった。本遺跡が初例である。平成16年度の調査で川原湯勝沼遺跡(49)で焼土を伴う土坑から 5 世紀末～6 世紀初頭の土師器と遺構外で剣形模造品、下原遺跡(24)でも同時期の住居跡 1 軒の他、土師器(片)がまとまって出土している。ともに吾妻川に直面した段丘面の自然流路あるいはその周辺で出土していることから水に関連した祭祀遺構の可能性が高い。この 2 遺跡出土の遺物は本遺跡で検出した住居跡と時期的にはほぼ合致しており注目される。

また昭和13年に刊行された『上毛古墳綜覧』によれば、大津地区の「鉄塚」、与喜屋地区の「五輪塚」が前方後円墳と報告されている。また昭和11年刊行の『群馬県吾妻郡誌』では林地区の「御塚」が古墳とされ、合計 3 基が古墳とされている。「五輪塚」は現況で畑としてならされているが、「鉄塚」と「御塚」は円形の形状を保ち、現在は墓地として利用されている。その他、本遺跡の南東側に位置する「てつか(てづか)」や林地区中棚にある「砂塚」に関しては『長野原町誌』で「宮内地区の「てづか」は鉄塚の訛音ではあるまいか。鉄塚の地名には城跡や屋敷跡などに多いといわれ、砂塚との対照がおもしろい」とあり、古墳という認識ではないが同じ林地区に少なくとも「塚」と付くものが 3 基あるということが注目される。いずれも古墳とするには根拠が薄く、今後の調査に期待したい。

(5) 奈良・平安時代

奈良時代に該当する遺跡は分布調査時の羽根尾 II 遺跡のみで増えていない。これに対して平安時代の遺跡の分布は町内全域に及んでおり、縄文時代とともに本町で原始古代の中心をなす時期である。調査した遺跡を挙げれば、本遺跡の他、坪井遺跡、向原遺跡、長畝 I 遺跡、楡木 II 遺跡(15)、花畑遺跡(22)、下原遺跡(24)、横壁勝沼遺跡(52)、横壁中村遺跡(54)、長野原一本松遺跡(63)などから住居跡が検出され、該期集落として把握されている。この中で楡木 II 遺跡では 9 世紀後半～10 世紀前半の住居跡が 26 軒検出され、「長」・「三家」の墨書土器も出土しており注目される。

(6) 中世

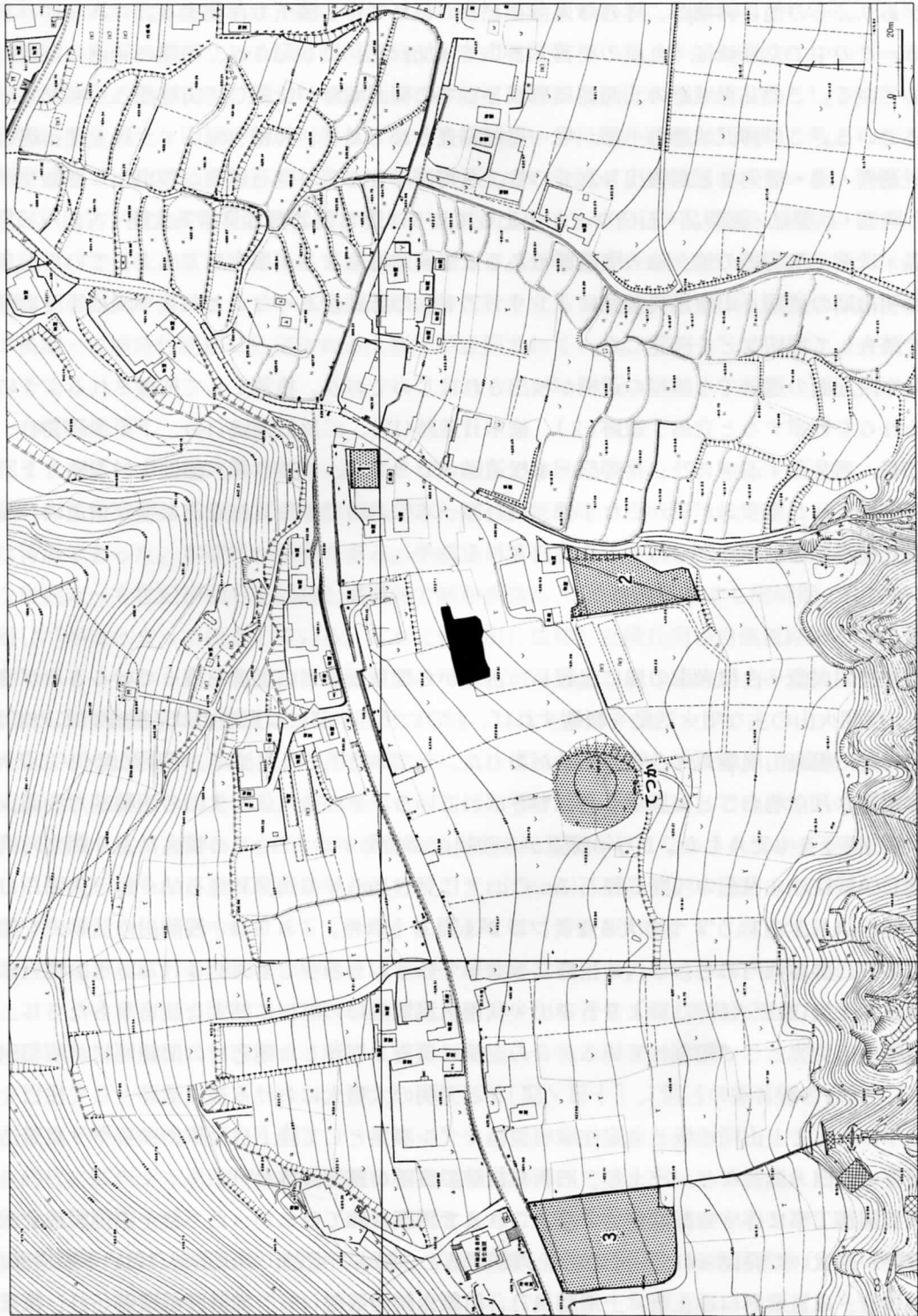
吾妻流域地帯には中世城館跡が点在している。その立地は当時の道との関連性が強く、分岐点の丘陵上など交通の要衝に多い。西から羽根尾城跡、長野原城跡、丸岩城跡(60)、柳沢城跡(61)、金花山砦跡(48)などがあり、その他に林城跡、林の烽火台などといわれている箇所も存在する。これらはいずれも山城である。この中で丸岩城は「丸屋の要害」として『加沢記』にも記され、節理の発達した岩山の山頂に立地している。この丸岩城跡の北西麓に里城としての柳沢城跡が位置し、山城部と丘城部から成る本城を構えている。この柳沢城跡の一部が唯一発掘調査されており、郭跡・堀切・土居・礎石建物・腰曲輪・石組遺構・溝・柵列などが検出されている。遺物のほとんどが礎石建物から出土しておりかつ豊富である。陶器・鉄製品・銅製品・石臼などが出土しており、特に陶器類は常滑系大甕・古瀬戸三耳壺・古瀬戸菊皿・珠洲系陶器甕の他、輸入陶磁器である景德鎮窯梅瓶などが準完形で出土している。また金花山砦跡は明治期の絵図『川原湯真図』に「トリデアト」の記載があったことから平成12年度に町教委と事業団で踏査して堀切などを確認した。

近年は河岸段丘面の遺跡でも該期の遺構が検出されはじめており、集落として把握されるようになっている。それらを列挙すると立馬Ⅰ遺跡(2)、楡木Ⅱ遺跡(15)、二反沢遺跡(16)、下原遺跡(24)、横壁中村遺跡(54)、西久保Ⅰ遺跡(57)、長野原一本松遺跡(63)となる。このうち、横壁中村遺跡と下原遺跡では石垣で区画された屋敷跡がそれぞれ1棟、長野原一本松遺跡では掘立柱建物と竪穴状遺構、楡木Ⅱ遺跡でも掘立柱建物などが検出されており注目される。

(7) 近世

長野原町は浅間火山・白根火山の麓に位置し、古くから度重なる火山災害を被っていることが地層からも窺える。浅間火山の主な噴火活動を概観すれば、すでに9万年前には黒斑山は活動をはじめており、2.4~2.1万年前に黒斑山崩壊を伴う噴火活動があった。その時発生した泥流は、応桑泥流・中之条泥流・前橋泥流と確認された地点ごとに異なる名称で呼ばれている。その後は仏岩火山の活動期で浅間板鼻黄色軽石(As-YP)降下をもたらした。1万年前頃から前掛山の活動が始まり、その噴火により縄文時代中期の浅間D軽石(As-D)、4世紀の浅間C軽石(As-C)、天仁元(1108)年の浅間B軽石(As-B)、天明3(1783)年の浅間A軽石(As-A)という4つの大きなテフラがもたらされた。これらは、浅間山の活動史を如実に物語る証であり、群馬県内の考古代の指標にもなっている。その中でも天明3(1783)年の噴火は軽石降下後に襲った泥流(鎌原火砕流)により吾妻川・利根川流域沿いの町村に甚大な被害をもたらし、有史以来の記録的火山災害として知られている。この泥流によって埋没した孀恋村の旧鎌原村が昭和54年から調査され、「延命寺観音堂の石段」、「十日ノ窪」など天明の大噴火における被災遺跡として注目を集めたが⁽¹³⁾、翌年に本町でも山間地域若者定住環境整備モデル事業として陸上自衛隊によるグランド造成中に日待供養塔・石臼・農具などが出土し、旧新井村跡の痕跡が確認された⁽¹⁴⁾。

近年、ダム関連工事に伴う発掘調査により、これまで認識されていなかった下位・中位段丘で泥流に埋もれた遺跡が相次いで発見された。それらを列挙すると、嶋木Ⅰ遺跡、下田遺跡(12)、下原遺跡(24)、中棚Ⅱ遺跡(25)、東宮遺跡(41)、西ノ上遺跡(47)、川原湯勝沼遺跡(49)、横壁勝沼遺跡(52)、横壁中村遺跡(54)、尾坂遺跡(64)、久々戸遺跡(65)となり、現在も継続調査中である。これらの遺跡では主として畑跡・ヤックラ・道・石垣・溝・井戸・覆屋構造物などが検出されている。現時点での成果として天明泥流に埋まった畑景観の復原や「ツカ」や平坦面から推定される「単位畑」の構造、さらには泥流とその



第4図 調査地点位置図 (S = 1/2,000)

逆級化構造のメカニズムなどに関して詳細な検討がなされている⁽¹⁵⁾。また平成14年度に町立中央小学校の屋内体育館・プールの新築に伴って、当時の分限者小林助右衛門屋敷の一部が発見され、石垣・土蔵・礎石建物跡が調査されている。さらに平成16年度には長野原市街地における下水道工事で建築部材・薬缶・鉄釜・石臼の他、「青面金剛塔」が泥流中から出土しており、旧長野原村が壊滅的状况であった一端を垣間見る発見があった。

推定される泥流到達範囲外でも該期の遺構・遺物は確認されている。上原IV遺跡(9)、二反沢遺跡(16)、幸神遺跡(62)、長野原一本松遺跡(63)が該当する。このうち上原IV遺跡では溝(旧河川流路)を検出しているがそこから下駄や曲物の底・農具・石鉢・陶磁器など生活道具が出土している。

3. 既往の調査

今回の調査は林宮原遺跡の第2次調査にあたる。本遺跡は平成16年9月現在で4次にわたる調査が実施されている(第4図)。

第1次調査は平成14年度に個人専用住宅建設に先立って実施された⁽¹⁶⁾。トレンチ調査により縄文時代包含層が検出されたが遺構は確認されなかった。包含層中から磨製石斧が1点出土している。

第3次・第4次調査は平成16年度に個人専用住宅建設に先立って実施された⁽¹⁷⁾。第3次調査ではトレンチ調査によりカマドの用材と考えられる平石が検出され、付近から須恵器杯片が1点出土した。表土下90~100cmでの検出だったことから現状保存という措置をとった。第4次調査は同じくトレンチ調査であったが遺構・遺物を検出するには至らなかった。

4. 基本層序

本遺跡の基本層序は第5図のA地点で確認した。試掘調査での所見と併せると以下ようになる。

第I層 暗灰褐色土

いわゆる表土で、上位は畑の耕作土である。締まりは上位が弱く、下位はやや強い。

第II層 黒褐色土

いわゆる黒ボク層で、ほとんど混入物は認められない。締まりは強い。

第III層 暗褐色土

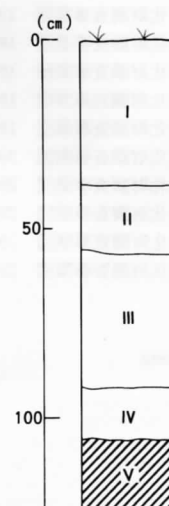
黄褐色軽石を多く含んでおり、古墳・平安時代の遺構はこの層中を掘り込んで構築されている。締まりは強い。調査区北側に向かってその厚さを増している。

第IV層 暗黄褐色土

いわゆる漸移層で、締まりは強い。

第V層 黄褐色土

いわゆる関東ローム層でスコリアを少量含んでいる。粘性・締まりともに強い。



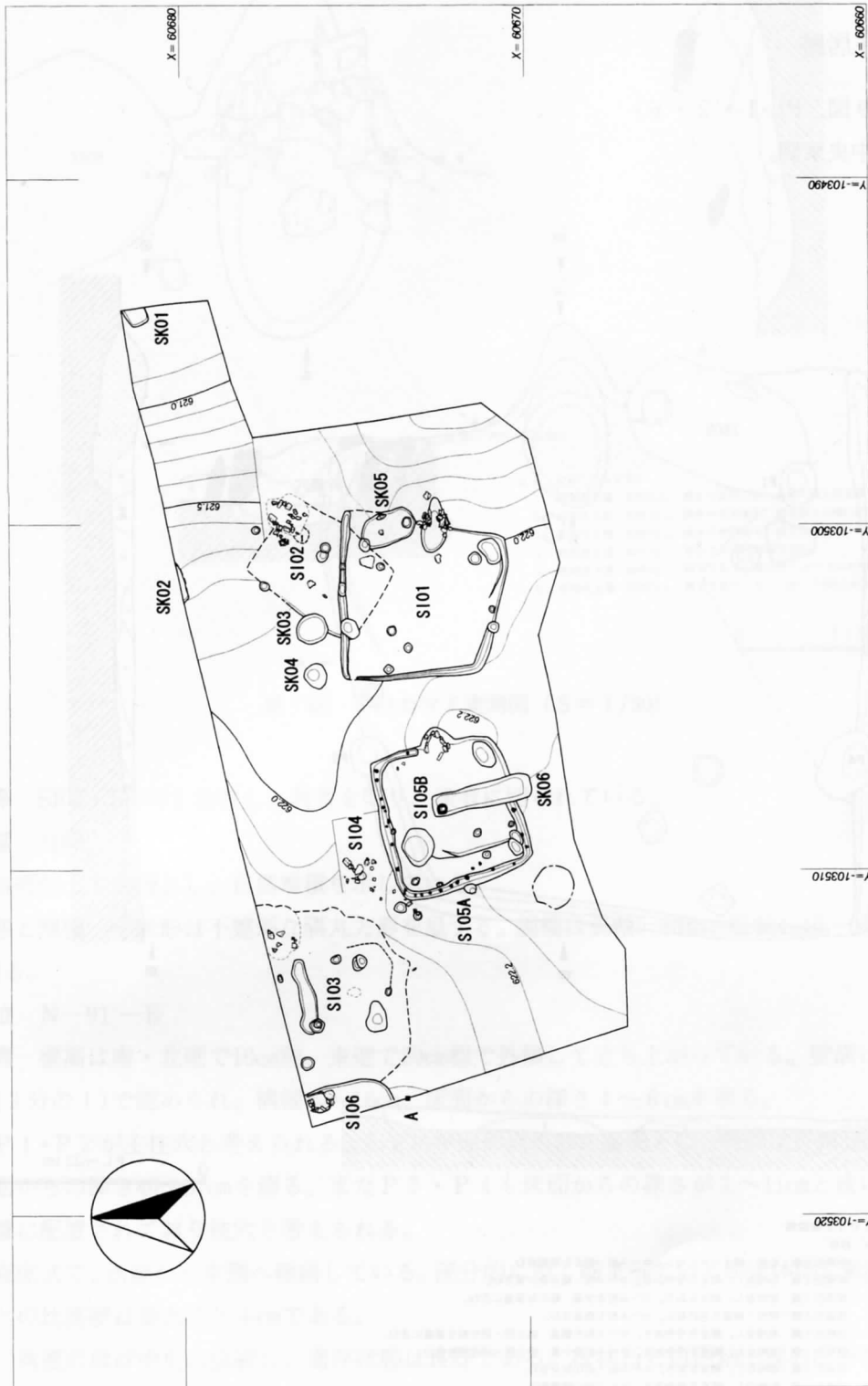
第3図 基本土層 (S = 1/20)

註

1. 長野原町教育委員会 1990『長野原町の遺跡—町内遺跡詳細分布調査—』
2. 主に下位・中位段丘で発見された天明泥流に埋もれた遺跡を追加・範囲拡張した他、遺跡名の変更を実施した。その改訂版の詳細については「群馬県文化財情報システム」Web版(<http://www2.wagamachi-guide.com/gunma/index.html>)で参照願いたい。本書では第2表および本章でできるだけ最新情報を記載した。
3. 長野原町教育委員会 2000~2004『町内遺跡Ⅰ~Ⅳ』
4. (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 2004『新田西沢遺跡 新田平林遺跡』
5. 長野原町教育委員会 2000『坪井遺跡Ⅱ』
6. 長野原町教育委員会 2001『暮坪遺跡』
7. 長野原町教育委員会 1992『長畝Ⅱ遺跡 坪井遺跡』
8. 註5と同じ。
9. 長野原町教育委員会 1990『クヌギⅡ遺跡』
10. 長野原町教育委員会 1995『向原遺跡』
11. 中沢道彦 1998「『氷1式』の細分と構造に関する試論」『長野県小諸市氷遺跡発掘調査資料図譜』第三冊 氷遺跡発掘調査資料図譜刊行会
12. 富田孝彦 2000「外輪原Ⅰ遺跡出土の弥生中期土器」『群馬県考古学手帳』10
13. 嬭恋村教育委員会 1981『鎌原遺跡発掘調査概報 浅間山噴火による埋没村落の研究』
1994『埋没村落 鎌原遺跡発掘調査概報(よみがえる延命寺)』
14. 長野原町教育委員会 1989『長野原町の文化財』
群馬県立歴史博物館 1995『第52回特別展 天明の浅間焼け』
15. (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団・国土交通省 2003『久々戸遺跡・中棚遺跡・下原遺跡・横壁中村遺跡』
16. 長野原町教育委員会 2003『町内遺跡Ⅲ』
17. 未報告。

参考文献(第2表の文献番号に対応)

1. 長野原町 1976『長野原町誌』上巻
2. 長野原町教育委員会 1990『長野原町の遺跡—町内遺跡詳細分布調査—』
3. 長野原町教育委員会 1995『柳沢城跡』
4. 長野原町教育委員会 2002『町内遺跡Ⅰ』
5. 長野原町教育委員会 2003『町内遺跡Ⅱ』
6. 長野原町教育委員会 2004『町内遺跡Ⅲ』
7. 長野原町教育委員会 2004『町内遺跡Ⅳ』
8. 小池富治郎編 1936『吾妻郡誌』吾妻教育学会
9. 山崎一・山口武夫 1972『吾妻郡城史』
10. 巾隆之 1979『石畑遺跡概報』長野原町教育委員会・高崎鉄道管理局
11. 群馬県 1988『群馬県史』資料編1
12. 上毛新聞社 1999『群馬県遺跡大辞典』
13. (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1998『長野原久々戸遺跡』
14. (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団・国土交通省 2002『ハッ場ダム発掘調査集成(1)』
15. (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団・国土交通省 2002『長野原一本松遺跡』
16. (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団・国土交通省 2003『久々戸遺跡・中棚遺跡・下原遺跡・横壁中村遺跡』
17. (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1995『年報14』
18. (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1996『年報15』
19. (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1997『年報16』
20. (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1998『年報17』
21. (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1999『年報18』
22. (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 2000『年報19』
23. (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 2001『年報20』
24. (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 2002『年報21』
25. (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 2003『年報22』
26. (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 2003『平成15年度事業概要 ハッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査・整理事業』



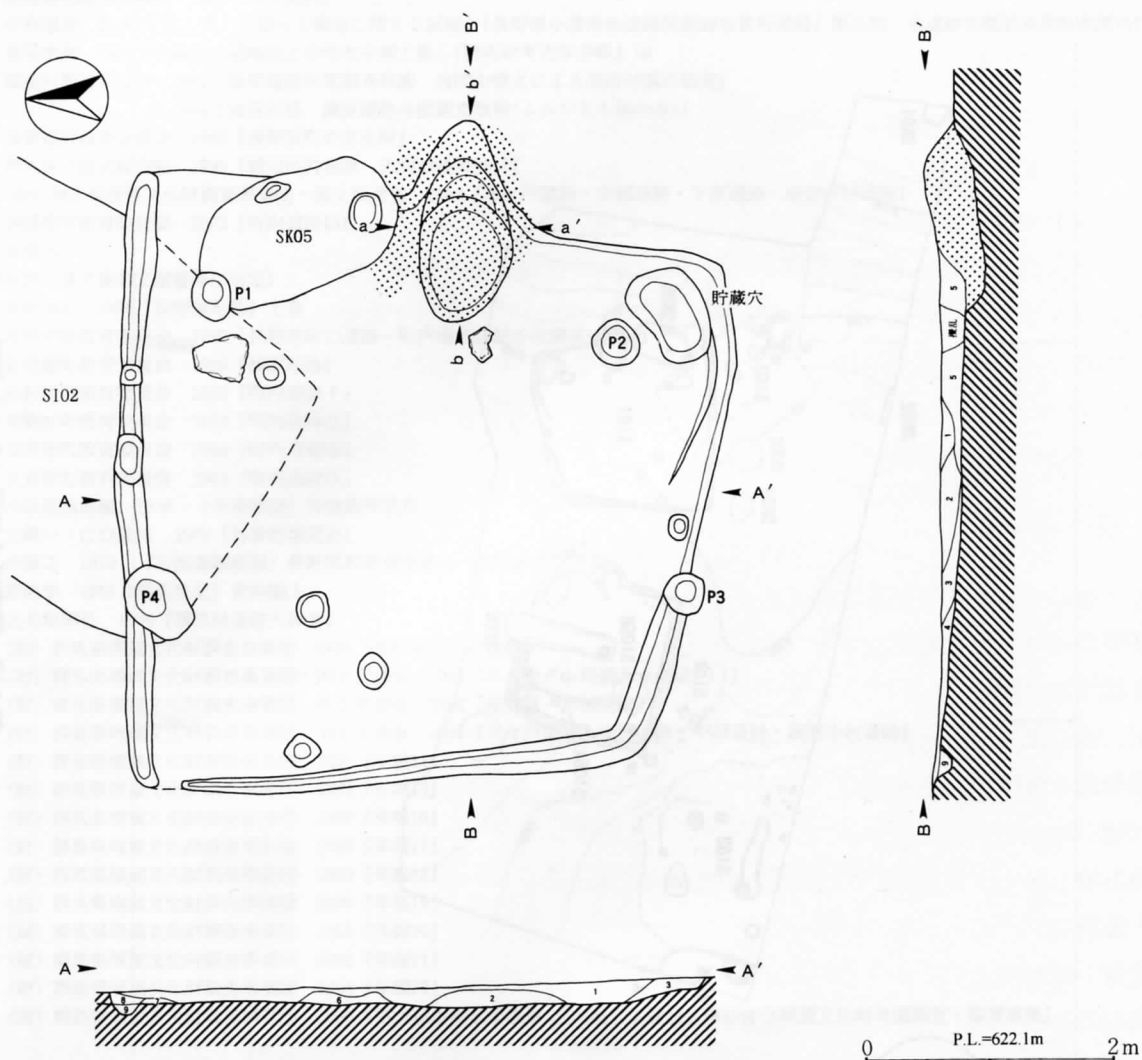
第5図 調査区全体図 (S = 1/200)

第三章 検出された遺構と遺物

1. 竪穴式住居跡

SI01 (第6～9図/PL.1・2・6)

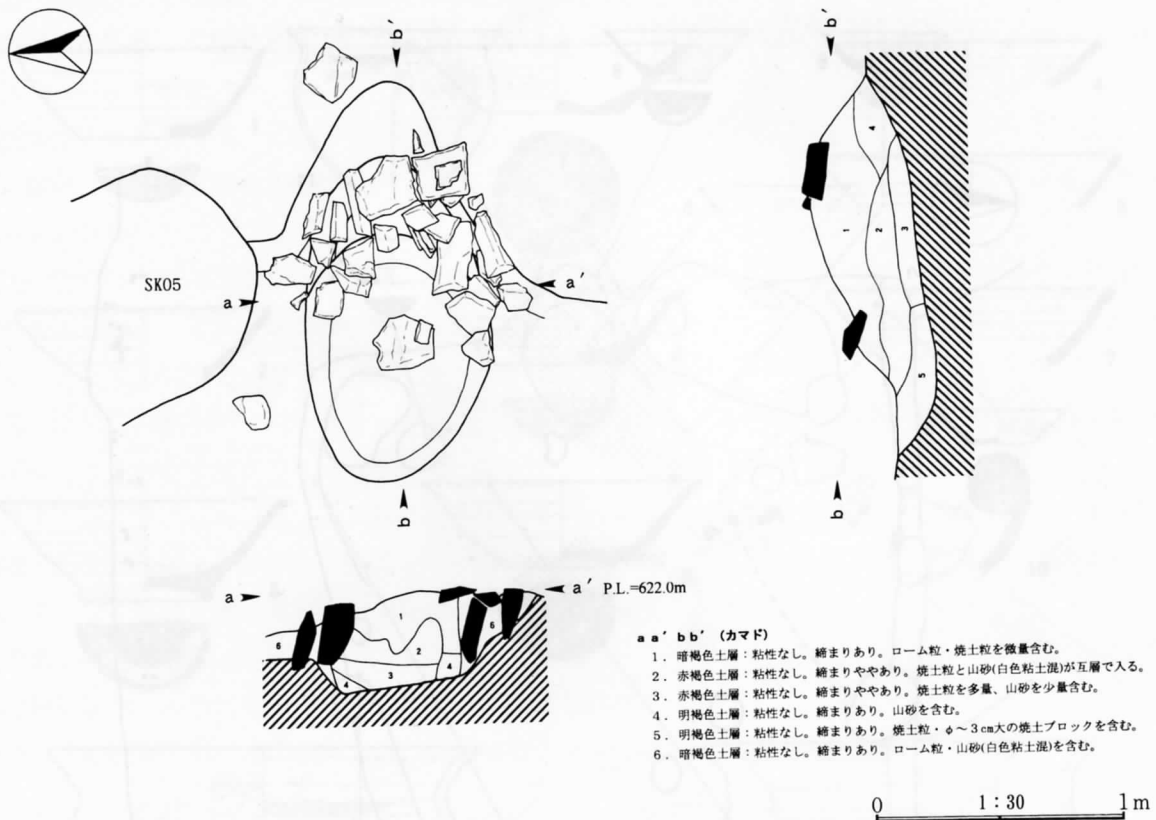
位置 調査区中央東側。



SI01土層説明
AA' BB'

1. 暗褐色土層：粘性・締まり共になし。ローム粒・軽石を微量含む。
2. 暗褐色土層：粘性なし。締まりややあり。ローム粒・軽石を少量含む。
3. 暗褐色土層：粘性なし。締まりあり。ローム粒を少量、軽石を多量に含む。
4. 暗褐色土層：粘性・締まり共になし。ローム粒を微量含む。
5. 暗褐色土層：粘性なし。締まりややあり。ローム粒を微量、焼土粒・炭化粒を多量に含む。
6. 暗褐色土層：粘性なし。締まりややあり。ローム粒を少量、焼土粒・炭化粒を含む。
7. 暗褐色土層：粘性なし。締まりあり。ローム粒・炭化粒を含む。
8. 暗褐色土層：粘性なし。締まりややあり。ローム粒を微量含む。
9. 明褐色土層：粘性なし。締まりなし。ローム粒・ロームブロックを含む。

第6図 SI01実測図 (S = 1/60)



第7図 SI01カマド実測図 (S = 1/30)

重複関係 SI02・SK05と重複し、前者を切り、後者に切られている。

遺存状態 良好。

覆土 暗褐色土を基調とし、自然堆積を示している。

平面形態と規模 平面形は不整形な隅丸方形を呈する。規模は長軸5.20m、短軸4.40～95m、床面積21.8m²を測る。

主軸方位 N-91°-E

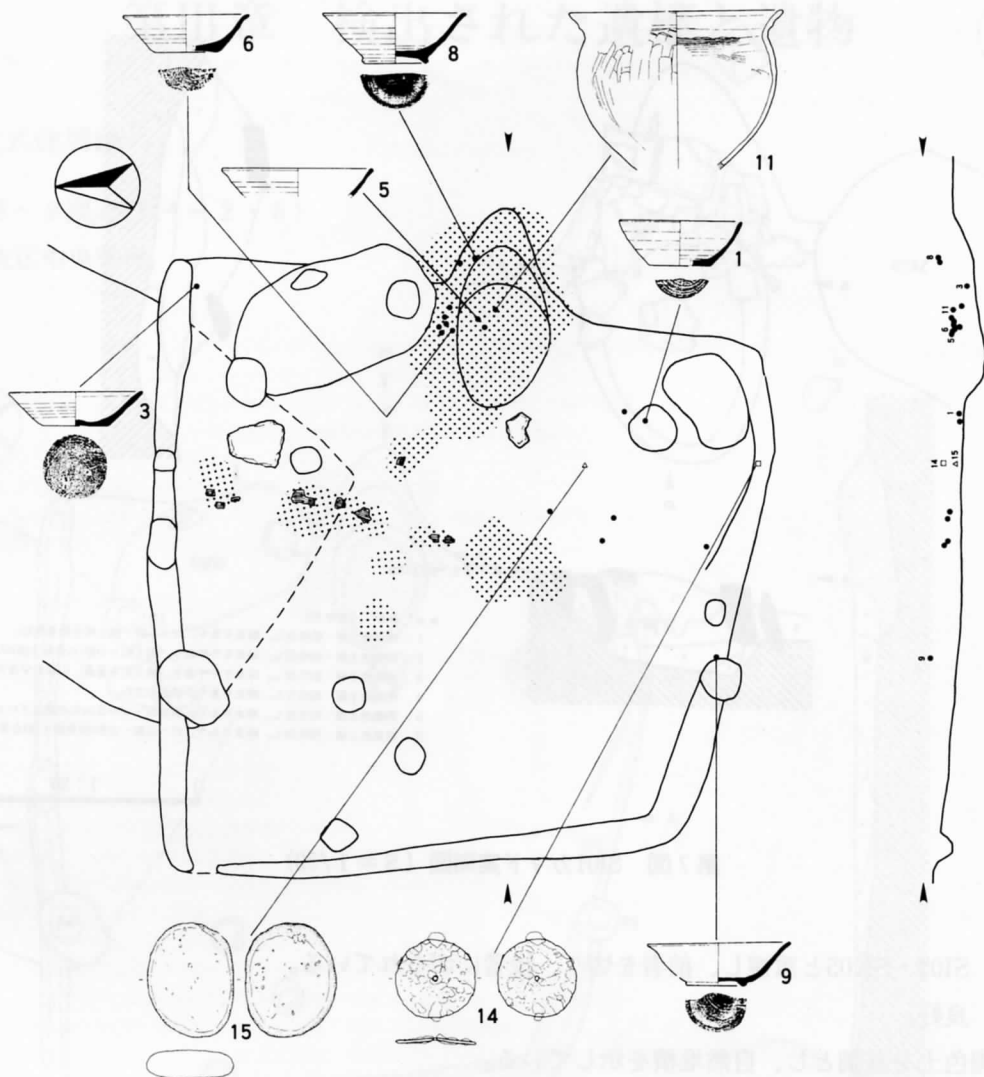
壁・壁溝 壁高は南・北壁で10cm程、東壁で20cm程で外傾して立ち上がっている。壁溝は北壁・西壁・南壁(約3分の1)で認められ、溝幅6～16cm、床面からの深さ4～6cmを測る。

柱穴 P1・P2が支柱穴と考えられる。ともに平面形は円形を基調とし、規模は長軸39cm、短軸30～38cm、床面からの深さ40～57cmを測る。またP3・P4も床面からの深さが7～11cmと浅いものの、呼応する位置に配置されており柱穴と考えられる。

床面 直床式で、西側から東側へ傾斜している。部分的に堅く締まっているが全体的に軟弱である。SI02の床面との比高差は最大で+4cmである。

カマド 東壁のほぼ中央に位置し、遺存状態は良好である。板状石と白色粘土混の山砂を用材としている。規模は全長159cm、最大幅110cmを測る。煙道部は壁面から65～86cm突き出す状態を採っている。火床面は床面から18cm掘り込まれている。

その他の施設 南東コーナー付近に貯蔵穴が認められる。平面形は楕円形を呈し、規模は長軸80cm、短



第8図 SI01遺物出土状況図 (S = 1/60)

軸45~55cm、床面からの深さ13cmを測る。

遺物検出状況 遺物はカマド・貯蔵穴付近に集中して検出された。また住居中央付近で焼土・炭化材が検出されたことから焼失住居と考えられる。

遺物 須恵器杯8点(うち墨書土器1点)、須恵器椀2点、須恵器羽釜1点、土師器甕2点、鉄製紡錘車1点、磨石1点を図示し得た(第8図)。

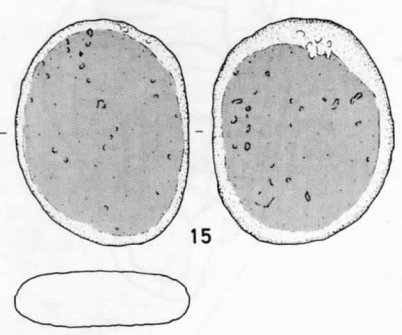
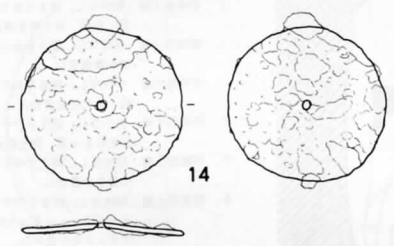
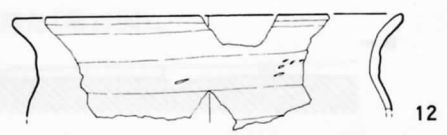
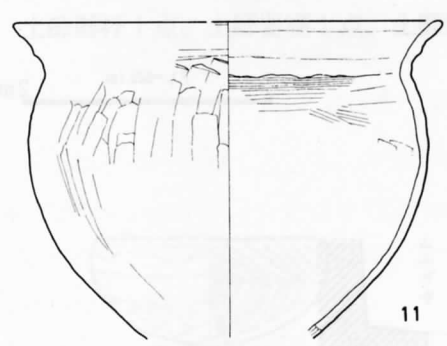
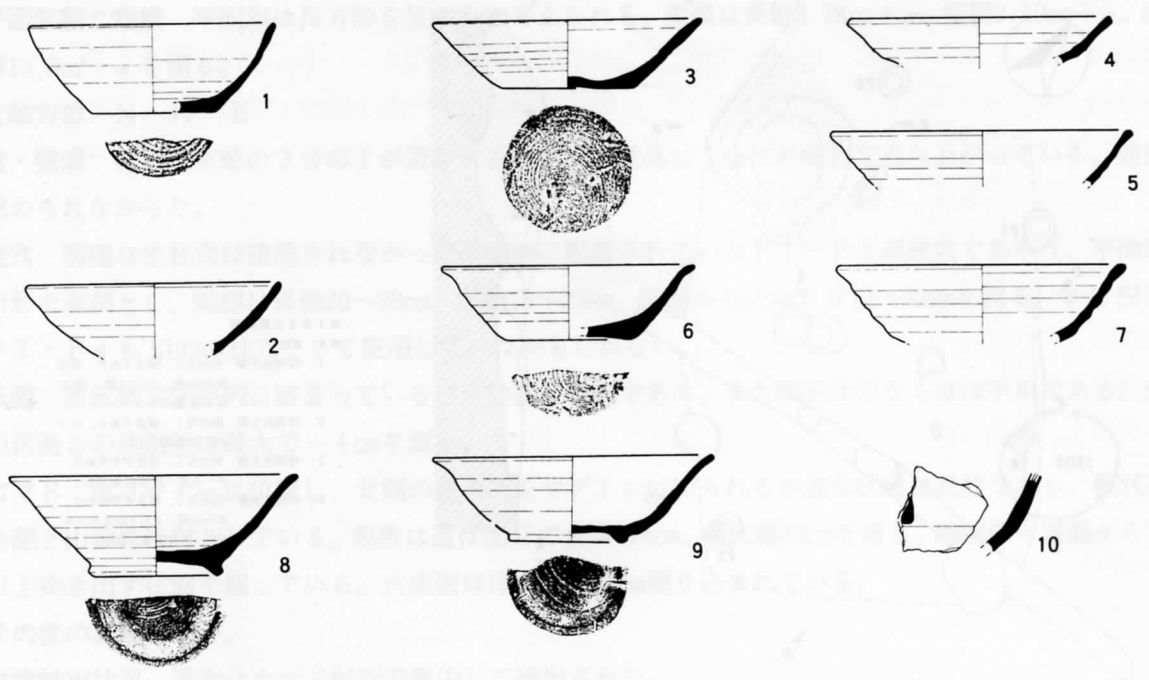
SI02 (第10・11図/PL.1~3・7)

位置 調査区中央北東側。

重複関係 SI01、SK03と重複しこれらに切られる。

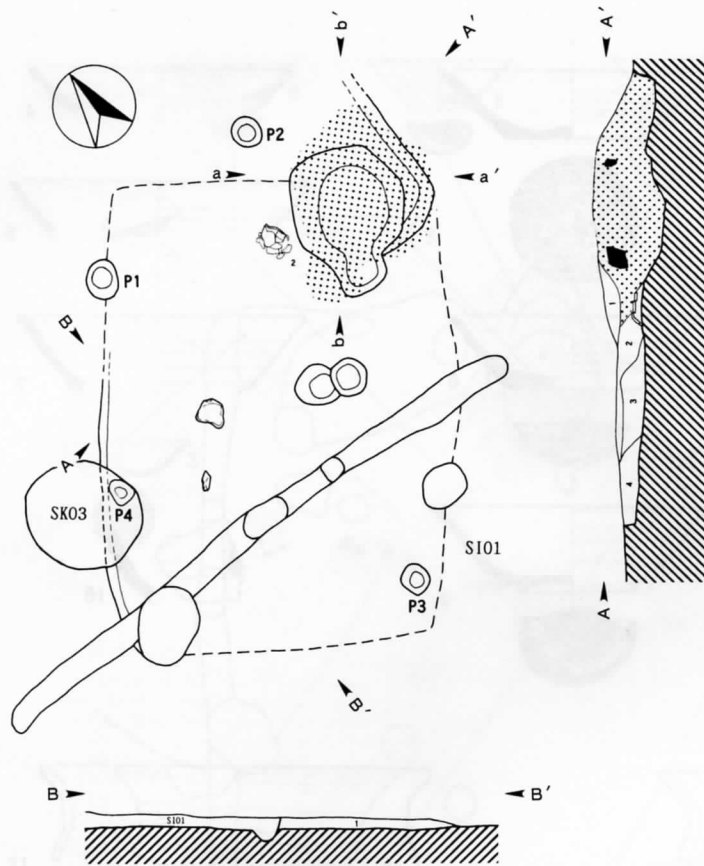
遺存状態 北コーナーおよびカマドの煙道部はサブトレにより消失しており、全体的にはやや不良。

出土 遺物 実測図



0 1~9 1:4 10cm
 0 10・14・15 1:3 10cm

第9図 SI01出土遺物実測図 (S = 1/4・1/3)

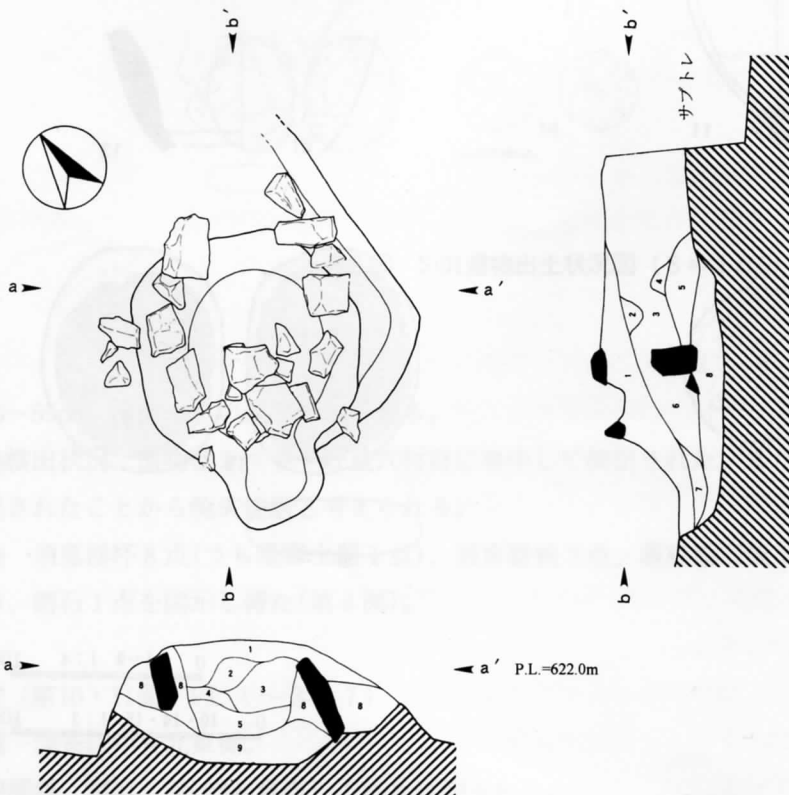


S102土層説明

AA' BB'

1. 暗褐色土層：粘性なし。締まりあり。炭化粒を少量、ローム粒・焼土粒を微量含む。
2. 暗褐色土層：粘性なし。締まりあり。ローム粒を微量含む。
3. 暗褐色土層：粘性なし。締まりややあり。ローム粒・炭化粒を含む。
4. 明褐色土層：粘性なし。締まりややあり。ローム粒・ $\phi \sim 1$ cm大ロームブロックを多量に含む。

0 P.L.=622.1m 2m



a a' b b' (カマド)

1. 暗褐色土層：粘性なし。締まりあり。軽石・焼土粒を少量含む。
2. 暗褐色土層：粘性なし。締まりあり。焼土粒・山砂を微量含む。
3. 明褐色土層：粘性なし。締まりあり。焼土粒・山砂・炭化粒を多量に含む。
4. 暗褐色土層：粘性なし。締まりあり。焼土粒を微量含む。
5. 暗褐色土層：粘性なし。締まりあり。焼土粒・炭化粒を含む。
6. 暗褐色土層：粘性なし。締まりややあり。炭化粒を少量、焼土粒を含む。
7. 明褐色土層：粘性なし。締まりややあり。山砂を少量含む。
8. 暗褐色土層：粘性なし。締まりややあり。ローム粒・ $\phi \sim 2$ cm大のロームブロックを少量含む。
9. 明褐色土層：粘性なし。締まりあり。ローム粒・ $\phi \sim 3$ cm大のロームブロックを多量に含む。

0 1:30 1m

第10図 S102実測図 (S = 1/60 · 1/30)

覆土 暗褐色土を基調とし、自然堆積を示している。

平面形態と規模 平面形は長方形を呈すると考えられる。規模は長軸 $3.78\text{m} + \alpha$ 、短軸 $2.12\text{m} + \alpha$ 。床面積 $10.8\text{m}^2 + \alpha$ を測る。

主軸方位 N-34°-E

壁・壁溝 壁は北東壁の3分の1が遺存するのみで、壁高は7cmで外傾して立ち上がっている。壁溝は認められなかった。

柱穴 明確な主柱穴は確認されなかったが壁際に配置されているP1～P4が柱穴であろう。平面形は円形を基調とし、規模は長軸20～29cm、短軸14～22cm、床面からの深さは12～32cmを測る。またSI01のP1・P4もSI02の柱穴として使用していたかもしれない。

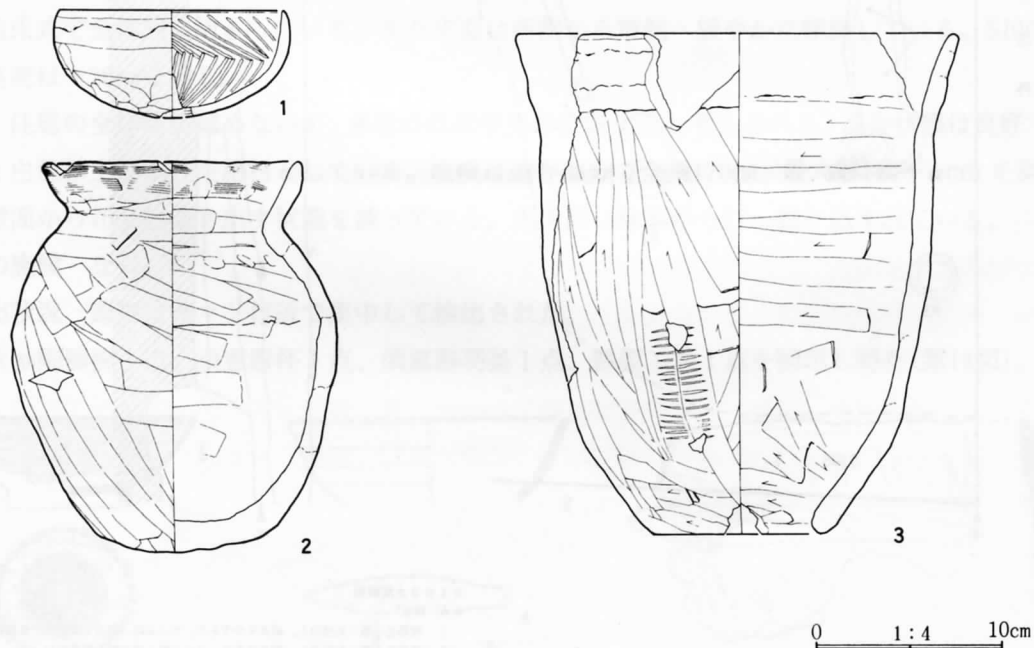
床面 直床式で部分的に締まっているが全体的に軟弱である。また傾斜は少なくほぼ平坦である。SI01の床面との比高差は最大で-4cmを測る。

カマド 東コーナーに位置し、北側の煙道部をサブトレに切られるが遺存状態は良好である。板状石・角礫と山砂を用材としている。規模は遺存部分で全長114cm、最大幅89cmを測る。煙道部は壁面から25cm以上突き出す状態を採っている。火床面は床面から17cm掘り込まれている。

その他の施設 なし。

遺物検出状況 遺物はカマド付近で集中して検出された。

遺物 土師器杯1点、土師器甕1点、土師器甕1点を図示し得た(第11図)。



第11図 SI02出土遺物実測図 (S = 1/4)

SI03 (第12~14図/PL. 3・7)

位置 調査区西北側。

重複関係 SI04・06と重複し、前者との新旧関係は不明、後者を切っている。

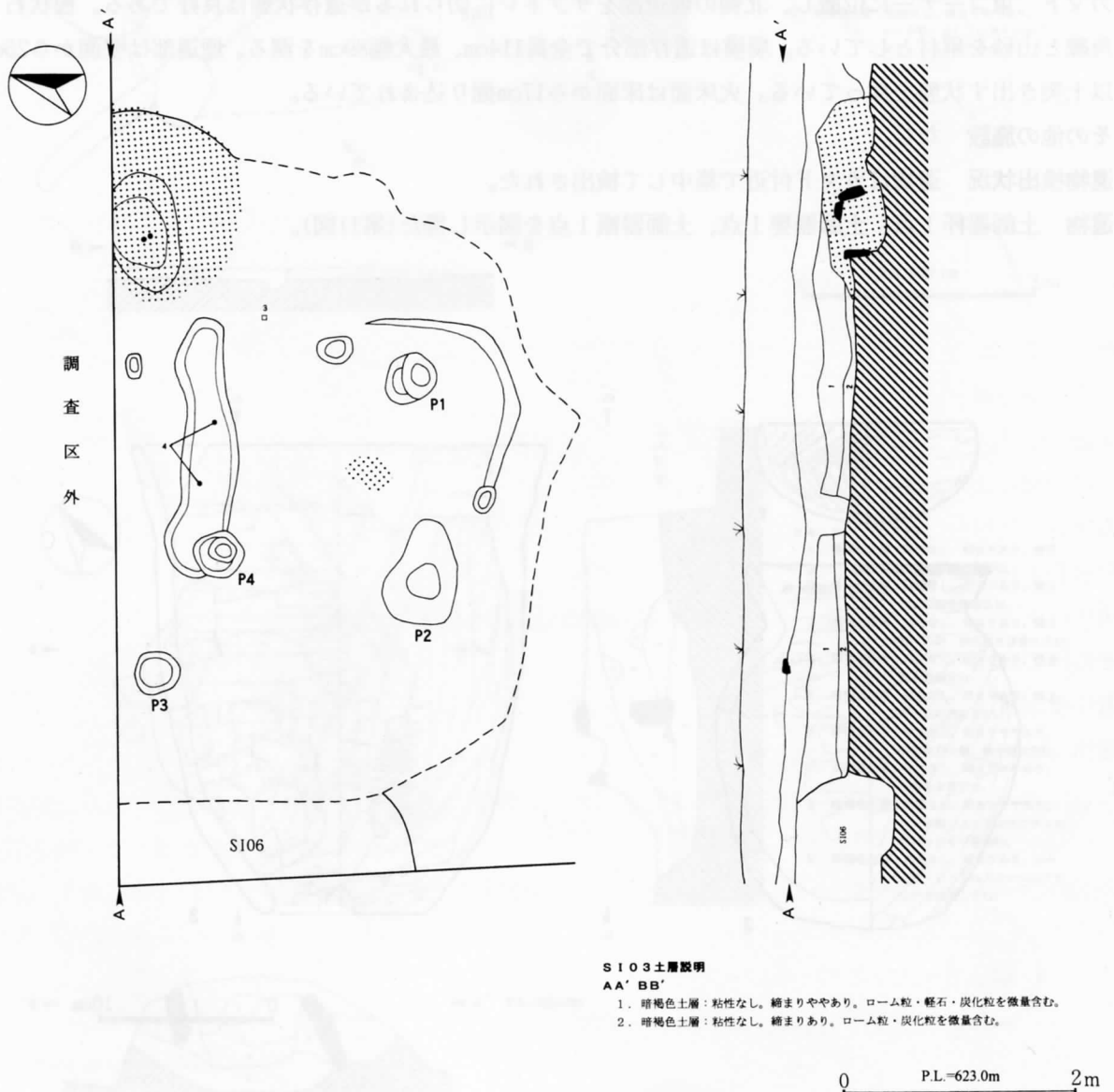
遺存状態 調査区外に延びており、約2分の1の検出である。暗褐色土層中での検出だったため、はっきりした壁は不明で、床面と考えられる硬化面の範囲を住居の範囲と判断した。全体的にはやや不良。

覆土 暗褐色土を基調とし、自然堆積を示している。

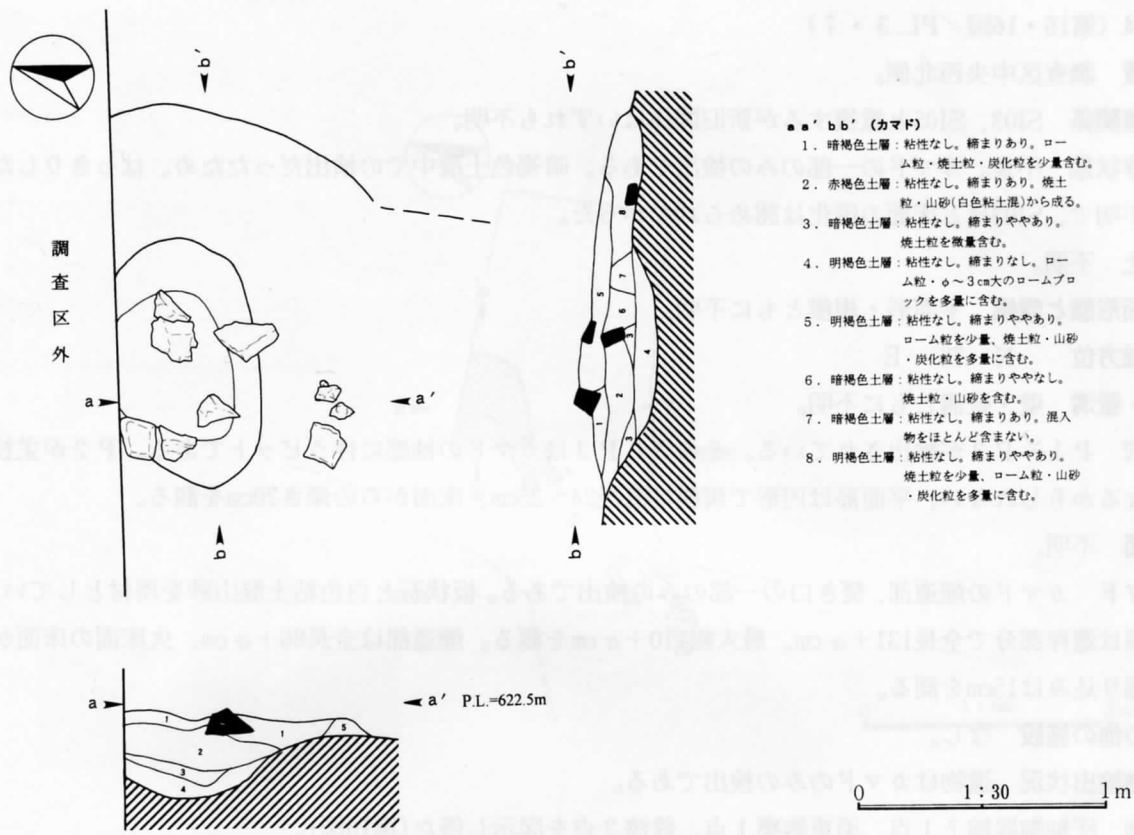
平面形態と規模 平面形は隅丸方形を呈すると考えられる。規模は長軸5.86m、短軸3.94m + α 、床面積18.9m² + α を測る。

主軸方位 N-72°-E

壁・壁溝 壁は調査区内では確認できなかったが、北壁セクションでは壁高は40cm程で外傾して立ち上がっている。壁溝は認められなかった。



第12図 SI03実測図 (S = 1/60)



- a a' b b' (カマド)
1. 暗褐色土層：粘性なし。締まりあり。ローム粒・焼土粒・炭化粒を少量含む。
 2. 赤褐色土層：粘性なし。締まりあり。焼土粒・山砂(白色粘土混)から成る。
 3. 暗褐色土層：粘性なし。締まりややあり。焼土粒を微量含む。
 4. 明褐色土層：粘性なし。締まりなし。ローム粒・φ~3cm大のロームブロックを多量に含む。
 5. 明褐色土層：粘性なし。締まりややあり。ローム粒を少量、焼土粒・山砂・炭化粒を多量に含む。
 6. 暗褐色土層：粘性なし。締まりややなし。焼土粒・山砂を含む。
 7. 暗褐色土層：粘性なし。締まりややあり。混入物をほとんど含まない。
 8. 明褐色土層：粘性なし。締まりややあり。焼土粒を少量、ローム粒・山砂・炭化粒を多量に含む。

第13図 SI03カマド実測図 (S = 1/30)

柱穴 P1が主柱穴と考えられる。平面形は楕円形を呈し、規模は長軸46cm、短軸40cm、床面からの深さは46cmを測る。またP2~P4も柱穴と考えられる。

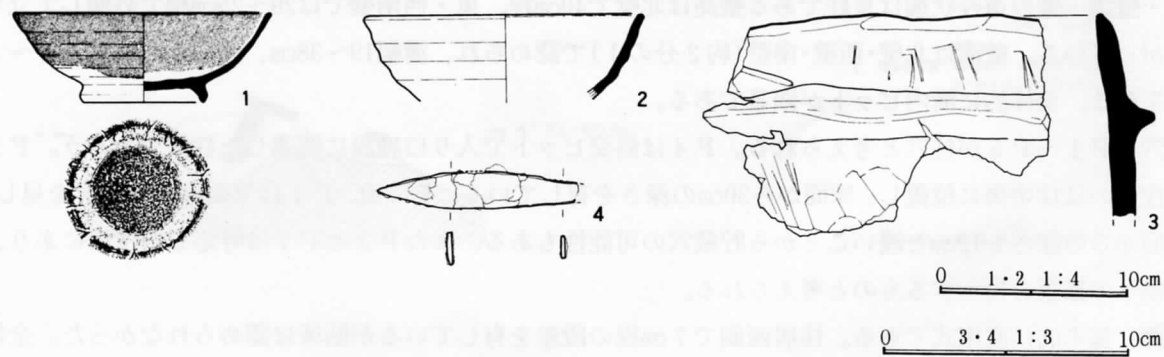
床面 貼床式で全体的に締まっている。また床面は西側から東側へ緩やかに傾斜している。SI06の床面との比高差は+26cmを測る。

カマド 住居の全体像が掴めないが、東壁のほぼ中央に位置すると考えられる。遺存状態は良好である。板状石と白色粘土混山砂を用材としている。規模は遺存部分で全長170cm、最大幅110+αcmを測る。煙道部は壁面から70cm程突き出す状態を採っている。火床面は床面から17cm掘り込まれている。

その他の施設 なし。

遺物検出状況 遺物はカマド付近で集中して検出された。

遺物 灰釉陶器碗1点、須恵器杯1点、須恵器羽釜1点、鉄製工具1点を図示し得た(第14図)。



第14図 SI03出土遺物実測図 (S = 1/4・1/3)

SI04 (第15・16図/PL.3・7)

位置 調査区中央西北側。

重複関係 SI03、SI05と重複するが新旧関係はいずれも不明。

遺存状態 不良。カマドの一部のみの検出である。暗褐色土層中での検出だったため、はっきりした壁は不明で、SI03ほど床面の硬化は認められなかった。

覆土 不明。

平面形態と規模 平面形・規模ともに不明。

主軸方位 N-78°-E

壁・壁溝 壁・壁溝ともに不明。

柱穴 P1～P3が検出されている。そのうちP3はカマドの袖部に伴うピットである。P2が支柱穴になるかもしれない。平面形は円形で規模は直径24～25cm、床面からの深さ20cmを測る。

床面 不明。

カマド カマドの煙道部、焚き口の一部のみの検出である。板状石と白色粘土混山砂を用材としている。規模は遺存部分で全長 $131 + \alpha$ cm、最大幅 $110 + \alpha$ cmを測る。煙道部は全長 $86 + \alpha$ cm、火床面の床面からの掘り込みは15cmを測る。

その他の施設 なし。

遺物検出状況 遺物はカマドのみの検出である。

遺物 灰釉陶器碗? 1点、須恵器甕1点、鉄滓2点を図示し得た(第16図)。

SI05AB (第17～20図/PL.4・8)

本住居跡はカマドの痕跡と考えられる焼土坑(カマドB)の存在や床面に見られる段差から住居の建て替え(SI05B → SI05A)と判断した。

SI05A

位置 調査区中央西側。

重複関係 SI04・SK06と重複し、前者との新旧関係は不明、後者に切られている。

遺存状態 良好。

覆土 暗褐色土を基調とし、自然堆積を示している。

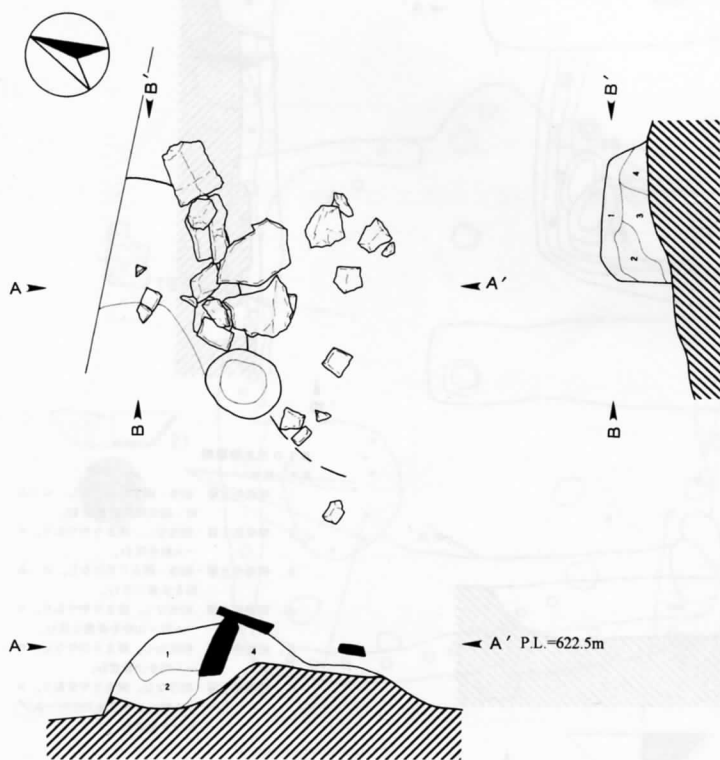
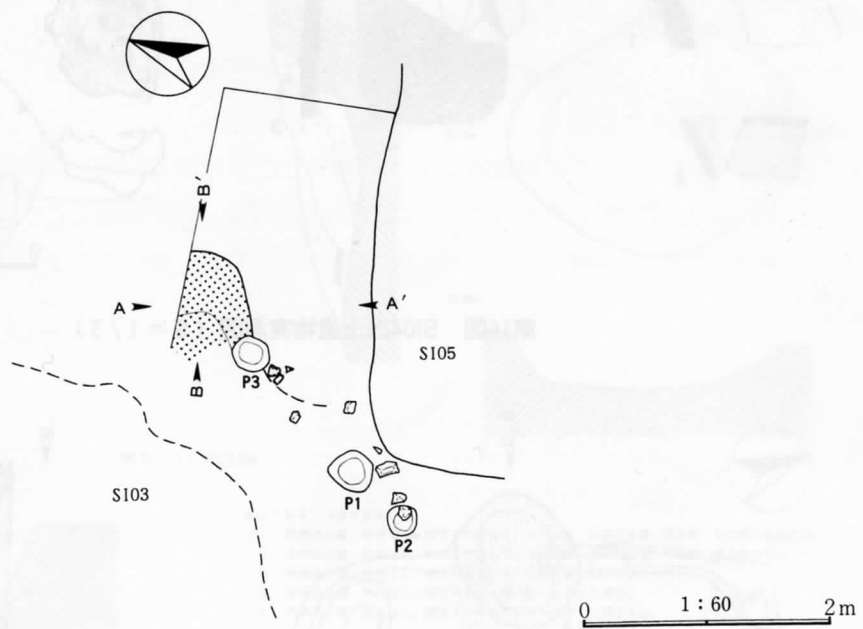
平面形態と規模 平面形は隅丸方形を呈する。規模は長軸4.98m、短軸3.98m、床面積17.1m²を測る。

主軸方位 N-67°-E

壁・壁溝 壁の遺存状態は良好である壁高は北壁で40cm程、東・西南壁では20～25cm程で外傾して立ち上がっている。壁溝は北壁・西壁・南壁(約2分の1)で認められ、溝幅19～38cm、床面からの深さ4～5cmを測る。全体的に溝内ピットが顕著である。

柱穴 P1～P5が柱穴と考えられる。P4は斜交ピットで入り口施設に関連した柱穴であろう。P5は住居のほぼ中央に位置し、床面から30cmの深さを有している。その他、P1は平面形が楕円形を呈し、床面からの深さも12cmと浅いことから貯蔵穴の可能性もある。またP2とP7は呼応した位置にあり、西側への拡張を指示するものと考えられる。

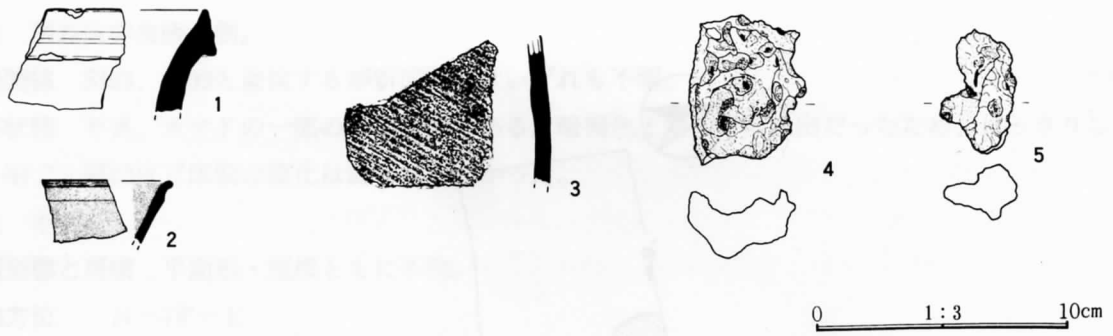
床面 基本的に直床式である。住居西側で7cm程の段差を有しているが貼床は認められなかった。全体的には軟弱で傾斜も顕著に認められない。



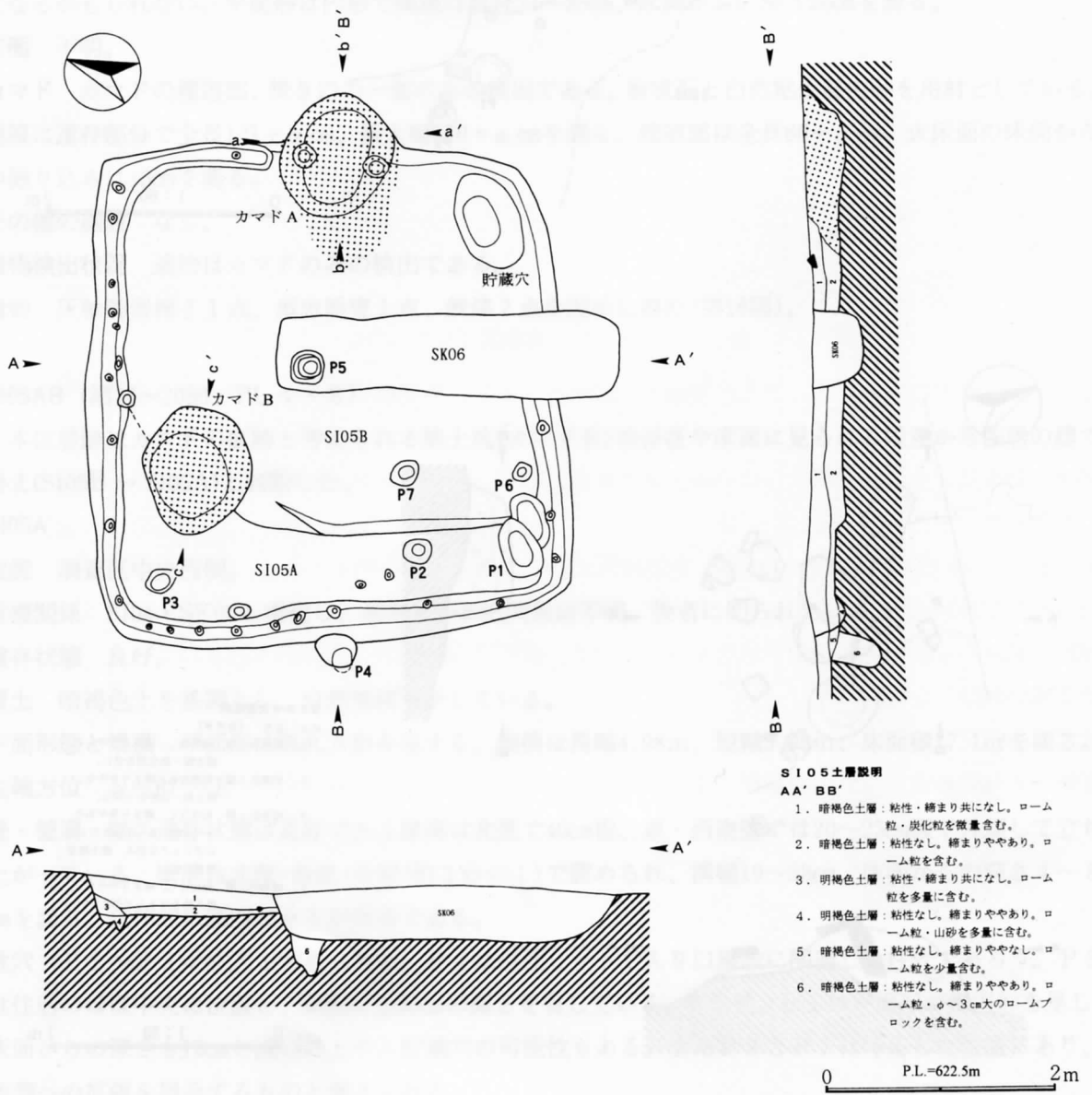
S104 土層説明
a a' b b' (カマド)

1. 明褐色土層：粘性なし。締まりややあり。焼土粒・炭化粒を含む。
2. 赤褐色土層：粘性なし。締まりややなし。焼土粒・山砂から成る。
3. 暗褐色土層：粘性なし。締まりややあり。ローム粒・ $\phi \sim 1$ cm大のロームブロックを含み、焼土粒を微量含む。
4. 暗褐色土層：粘性なし。締まりややなし。混入物をほとんど含まない。

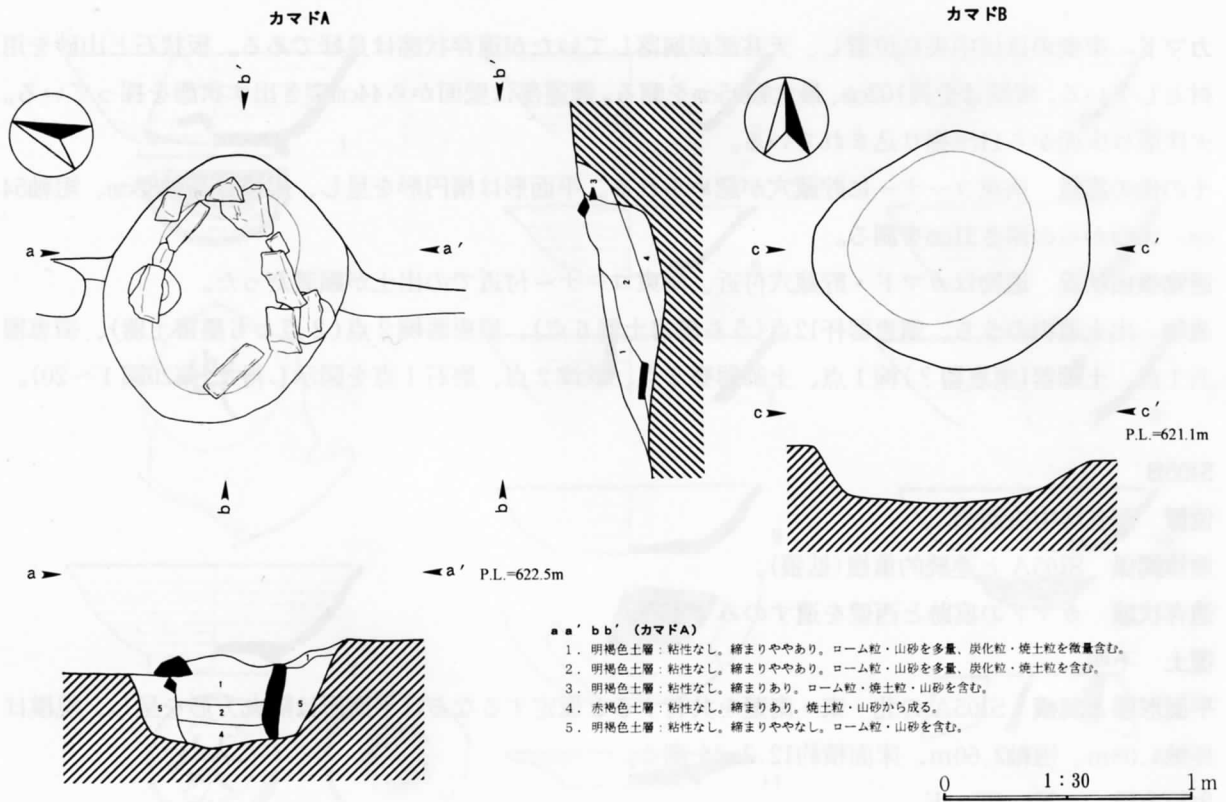
第15図 S104実測図 (S = 1/60・1/30)



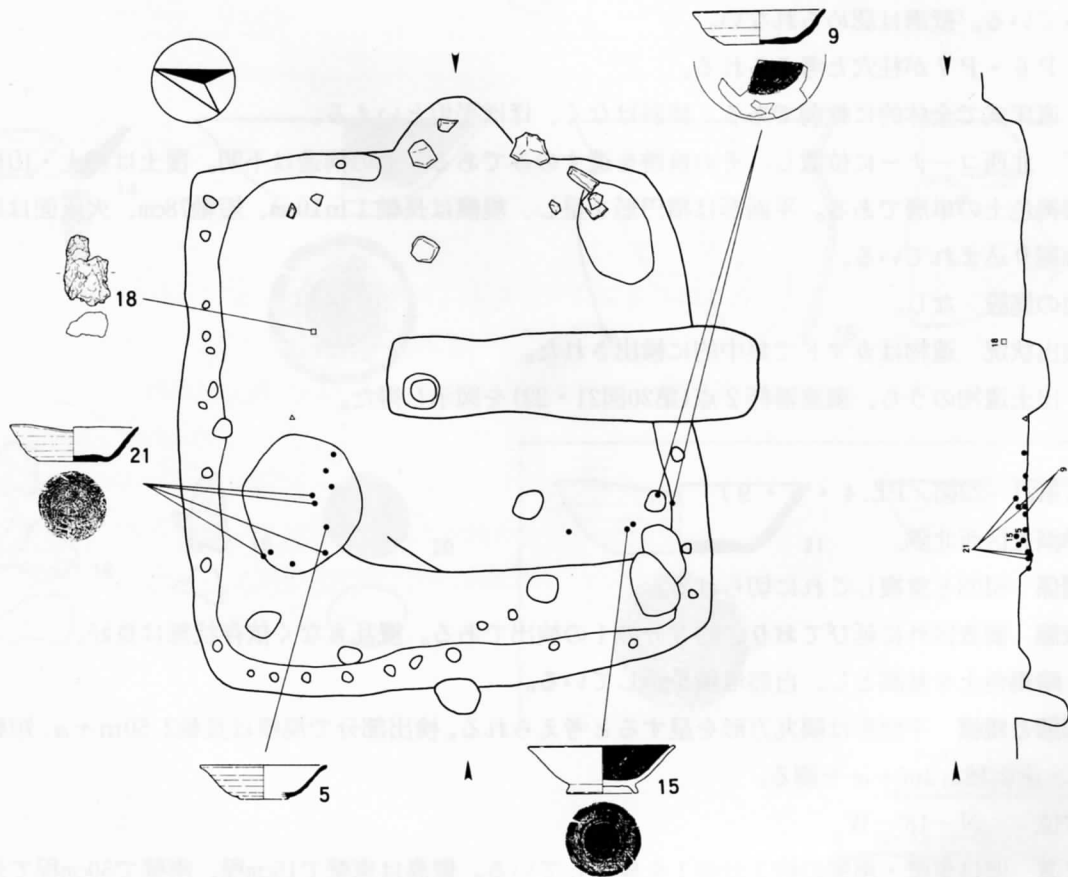
第16図 SI04出土遺物実測図 (S = 1/3)



第17図 SI05実測図 (S = 1/60)



第18図 SI05カマド実測図 (S = 1/30)



第19図 SI05遺物出土状況図 (S = 1/60)

カマド 東壁のほぼ中央に位置し、天井部が崩落していたが遺存状態は良好である。板状石と山砂を用材としている。規模は全長102cm、最大幅95cmを測る。煙道部は壁面から44cm突き出す状態を採っている。火床面は床面から11cm掘り込まれている。

その他の施設 南東コーナーに貯蔵穴が認められる。平面形は楕円形を呈し、規模は長軸88cm、短軸54cm、床面からの深さ31cmを測る。

遺物検出状況 遺物はカマド・貯蔵穴付近、南東コーナー付近での出土が顕著だった。

遺物 出土遺物のうち、須恵器杯12点(うち墨書土器6点)、須恵器椀2点(2点とも墨書土器)、須恵器皿1点、土師器(須恵器?)椀1点、土師器甕2点、鉄滓2点、磨石1点を図示し得た(第20図1~20)。

SI05B

位置 調査区中央西側。

重複関係 SI05A と連続的重複(拡張)。

遺存状態 カマドの痕跡と西壁を遺すのみで不良。

覆土 不明。

平面形態と規模 SI05A の北・東・南壁を共有すると仮定するならば平面形は隅丸方形を呈し、規模は長軸4.08m、短軸2.60m、床面積約12.2m²を測る。

主軸方位 N-66°-E

壁・壁溝 壁は西壁を遺すのみで、壁高は北壁で7cm程、SI05A の確認面から24cm程で、外傾して立ち上がっている。壁溝は認められない。

柱穴 P6・P7が柱穴と考えられる。

床面 直床式で全体的に軟弱である。傾斜はなく、ほぼ平坦といえる。

カマド 北西コーナーに位置し、その痕跡を遺すのみである。その構造は不明。覆土は焼土・山砂を含んだ暗褐色土の単層である。平面形は楕円形を呈し、規模は長軸1m10cm、短軸78cm、火床面は床面から20cm掘り込まれている。

その他の施設 なし。

遺物検出状況 遺物はカマドで集中的に検出された。

遺物 出土遺物のうち、須恵器杯2点(第20図21・22)を図示し得た。

SI06 (第21~23図/PL.4・5・9)

位置 調査区西北隅。

重複関係 SI03と重複しこれに切られる。

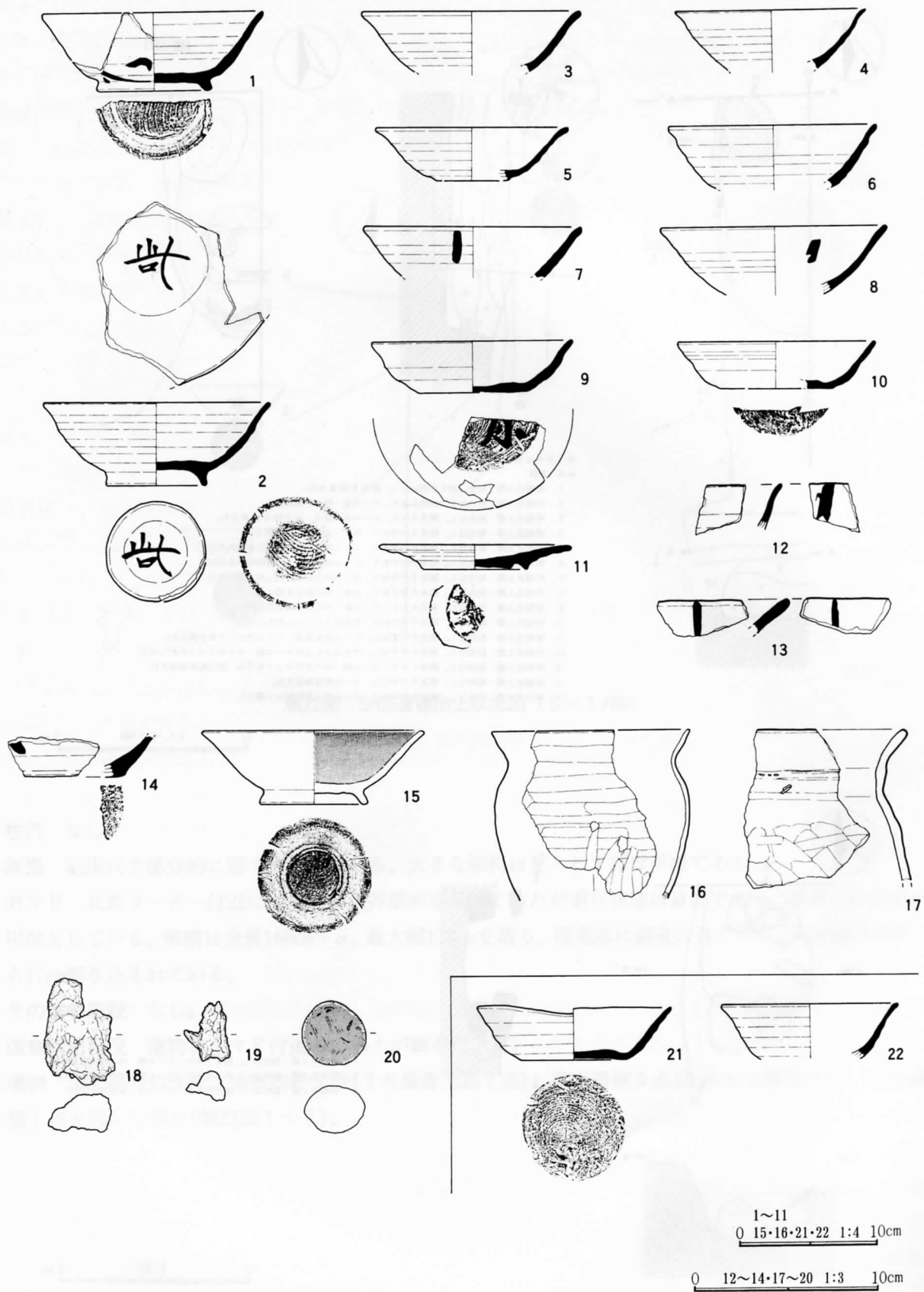
遺存状態 調査区外に延びており、約3分の1の検出である。攪乱もなく依存状態は良好。

覆土 暗褐色土を基調とし、自然堆積を示している。

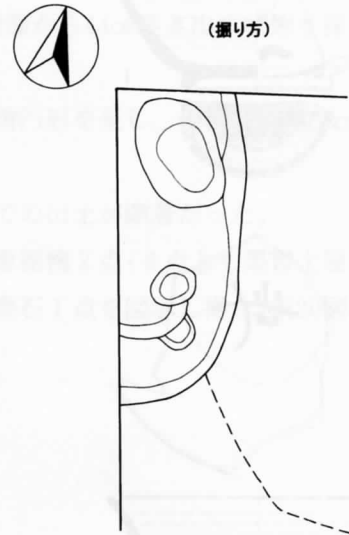
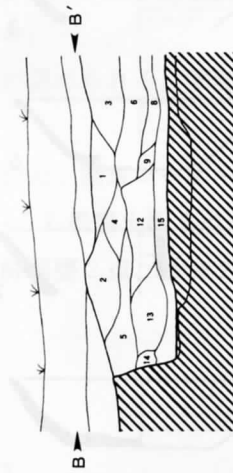
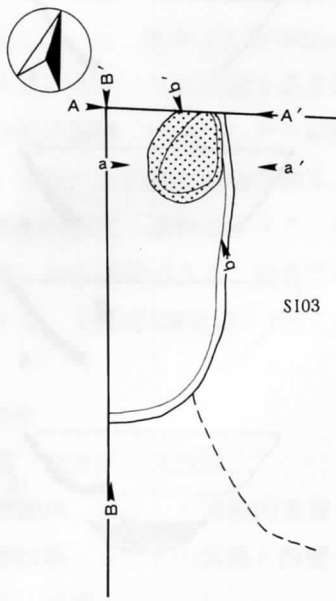
平面形態と規模 平面形は隅丸方形を呈すると考えられる。検出部分で規模は長軸2.50m+ α 、短軸1.20m+ α 、床面積2.2m²+ α を測る。

主軸方位 N-18°-W

壁・壁溝 壁は東壁・南壁の約3分の1を検出している。壁高は東壁で15cm程、南壁で50cm程で外傾して立ち上がっている。壁溝は認められなかった。

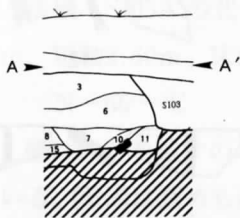


第20図 SI05出土遺物実測図 (S = 1/4 · 1/3)

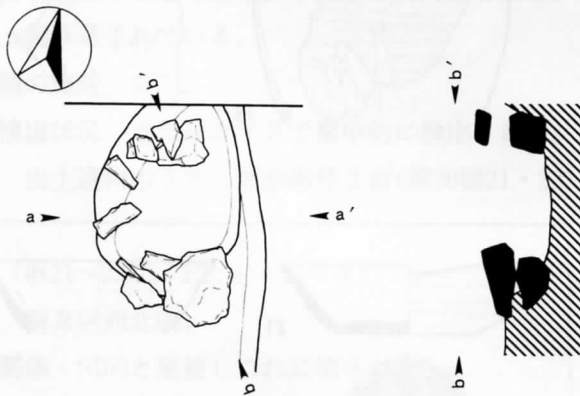


S106土層説明
AA' BB'

1. 暗褐色土層：粘性・締まり共になし。軽石を微量含む。
2. 暗褐色土層：粘性なし。締まりあり。ローム粒・軽石を微量含む。
3. 暗褐色土層：粘性なし。締まりあり。ローム粒・軽石・炭化粒を少量含む。
4. 暗褐色土層：粘性なし。締まりややあり。軽石・炭化粒を微量含む。
5. 暗褐色土層：粘性なし。締まりややあり。ローム粒・軽石・炭化粒を微量含む。
6. 暗褐色土層：粘性なし。締まりややあり。ローム粒・軽石・炭化粒を少量含む。
7. 暗褐色土層：粘性なし。締まりややあり。ローム粒を含み、炭化粒を微量含む。
8. 明褐色土層：粘性なし。締まりややあり。山砂・炭化粒を多量に含む。
9. 暗褐色土層：粘性なし。締まりあり。ローム粒・炭化物を微量含む。
10. 明褐色土層：粘性なし。締まりややあり。そのほとんどが山砂から成る。
11. 明褐色土層：粘性なし。締まりややなし。ローム粒を多量、ロームブロックを少量含む。
12. 明褐色土層：粘性なし。締まりややなし。そのほとんどがローム粒・ロームブロックから成る。
13. 明褐色土層：粘性なし。締まりあり。ローム粒・ロームブロックを含み、炭化粒を微量含む。
14. 暗褐色土層：粘性なし。締まりややなし。ローム粒を微量含む。
15. 暗褐色土層：粘性なし。締まりややあり。ローム粒・炭化粒を少量含む。

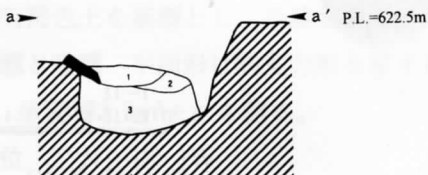


0 P.L.=623.0m 2m



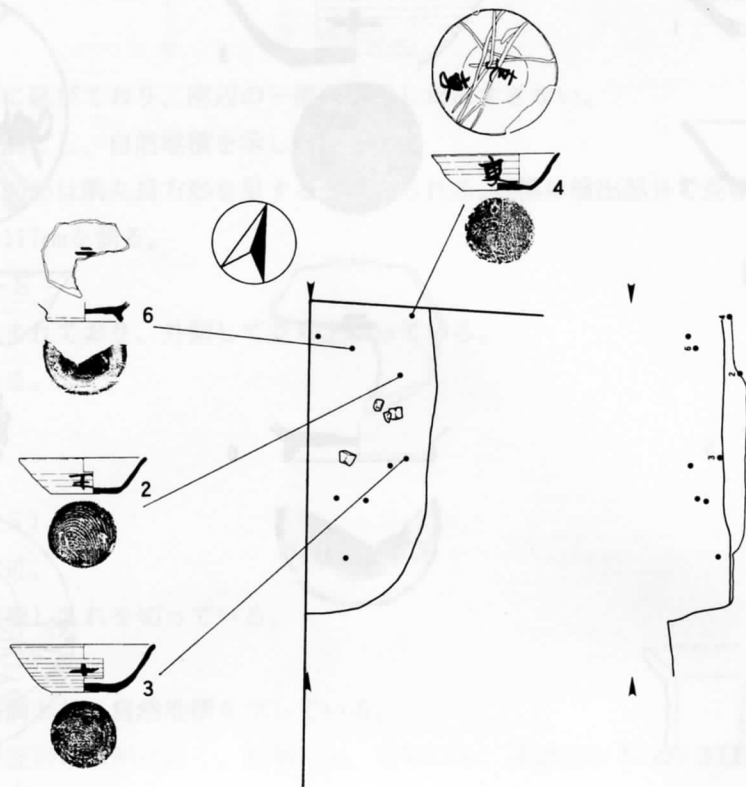
a a' (カマド)

1. 暗褐色土層：粘性なし。締まりあり。ローム粒・焼土粒を微量含む。
2. 明褐色土層：粘性なし。締まりあり。ローム粒・山砂を多量含む。
3. 明褐色土層：粘性なし。締まりあり。ローム粒・炭化粒を含む。



0 1:30 1m

第21図 SI06実測図 (S = 1/60・1/30)



第22図 SI06遺物出土状況図 (S = 1/60)

柱穴 なし。

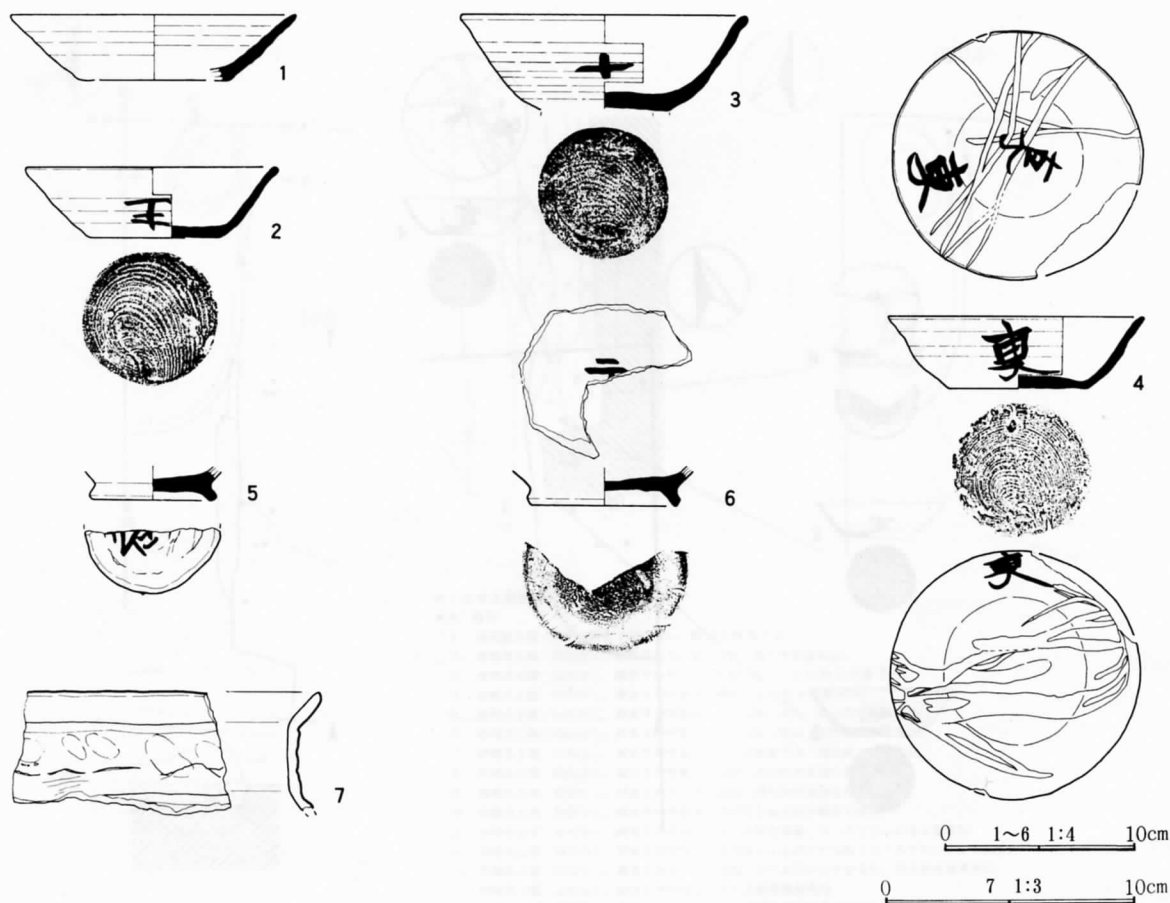
床面 貼床式で部分的に堅く締まっている。大きな傾斜は見られずほぼ平坦である。

カマド 北東コーナー付近に位置し、天井部が崩落していたが遺存状態は良好である。板状石と山砂を用材としている。規模は全長 $160\text{cm} + \alpha$ 、最大幅 116cm を測る。煙道部は調査区外で不明。火床面は床面から 17cm 掘り込まれている。

その他の施設 なし。

遺物検出状況 遺物はカマド付近での出土が顕著だった。

遺物 出土遺物のうち、須恵器杯3点(うち墨書土器2点)、須恵器碗3点(3点とも墨書土器)、土師器甕1点を図示し得た(第23図1~7)。



第23図 SI06出土遺物実測図 (S = 1/4・1/3)

2. 土坑

SK01 (第24図/PL. 5)

位置 調査区北東隅。

重複関係 なし。

遺存状態 調査区外に延びており、約3分の1の検出である。

覆土 暗褐色土を基調とし、自然堆積を示している。

平面形態と規模 平面形は隅丸長方形を呈すると考えられる。規模は検出部分で長軸63cm、短軸51cmで、確認面からの深さは47cmを測る。

長軸方位 N-31°-E

壁面 北壁は外傾、南壁はやや内傾しながら垂直気味に立ち上がっている。

床面 平坦である。

遺物 なし。

SK02 (第24図/PL. 5)

位置 調査区北側。

重複関係 なし。

遺存状態 調査区外に延びており、南辺の一部を検出したにすぎない。

覆土 暗褐色土を基調とし、自然堆積を示している。

平面形態と規模 平面形は隅丸長方形を呈すると考えられる。規模は検出部分で長軸138cm、短軸15cmで、確認面からの深さは117cmを測る。

長軸方位 N-76°-E

壁面 2段に掘り込まれており、外傾して立ち上がっている。

床面 ほぼ平坦である。

遺物 なし。

SK03 (第24図/PL. 5)

位置 調査区中央付近。

重複関係 SI02と重複しこれを切っている。

遺存状態 良好。

覆土 暗褐色土を基調とし、自然堆積を示している。

平面形態と規模 平面形は円形に近く、長軸92cm、短軸83cm、確認面からの深さは12cmを測る。

長軸方位 N-26°-W

壁面 外傾して立ち上がっている。

床面 ほぼ平坦である。

遺物 須恵器甕の胴部片が1点出土しているが図示するには至らなかった。

SK04 (第24図/PL. 5)

位置 調査区中央付近。

重複関係 なし。

遺存状態 良好。

覆土 暗褐色土を基調とし、自然堆積を示している。

平面形態と規模 平面形は楕円形を呈し、規模は長軸74cm、短軸65cm、確認面からの深さ24cmを測る。

長軸方位 N-74°-E

壁面 外傾して立ち上がっている。

床面 ほぼ平坦である。

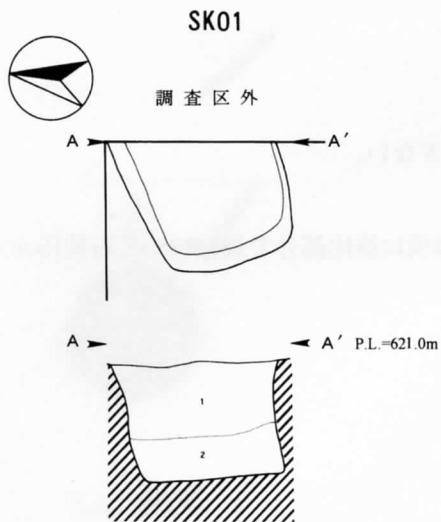
遺物 なし。

SK05 (第25図/PL. 5)

位置 調査区中央付近東寄り。

重複関係 SI01と重複しこれを切っている。

遺存状態 良好。



SK01土層説明

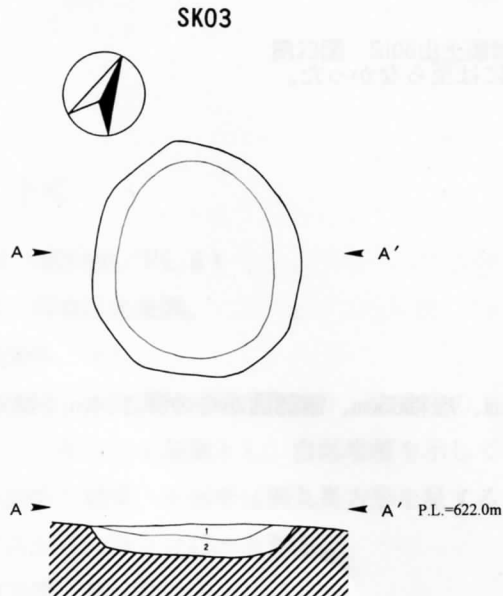
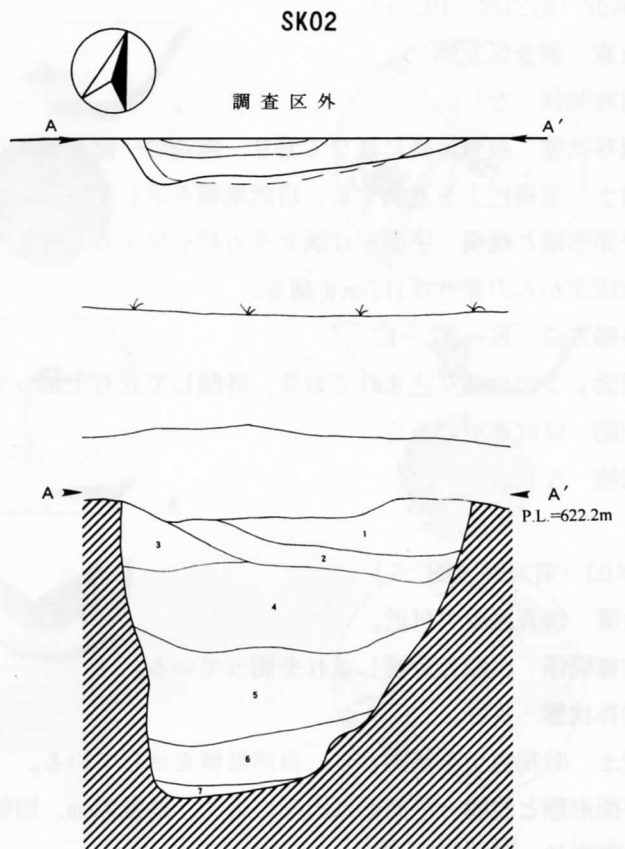
AA'

1. 暗褐色土層：粘性・締まり共になし。ローム粒を少量、軽石を微量含む。
2. 明褐色土層：粘性なし。締まりややあり。ローム粒・軽石を多量に含む。

SK02土層説明

AA'

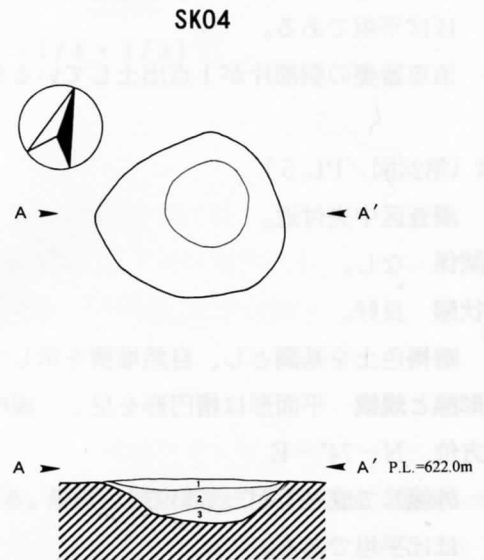
1. 暗褐色土層：粘性なし。締まりややあり。ローム粒・軽石を含む。
2. 暗褐色土層：粘性なし。締まりややなし。軽石を微量含む。
3. 暗褐色土層：粘性なし。締まりなし。ローム粒を微量含む。
4. 暗褐色土層：粘性なし。締まりややあり。ローム粒・φ~1cm大のロームブロックを少量、軽石を微量含む。
5. 暗褐色土層：粘性なし。締まりややあり。ローム粒を微量含む。
6. 暗褐色土層：粘性なし。締まりややあり。ローム粒を含む。
7. 暗褐色土層：粘性なし。締まりややなし。ローム粒・φ~2cm大のロームブロックを含む。



SK03土層説明

AA'

1. 暗褐色土層：粘性なし。締まりややあり。ローム粒を微量含む。
2. 明褐色土層：粘性なし。締まりややあり。ローム粒を含む。



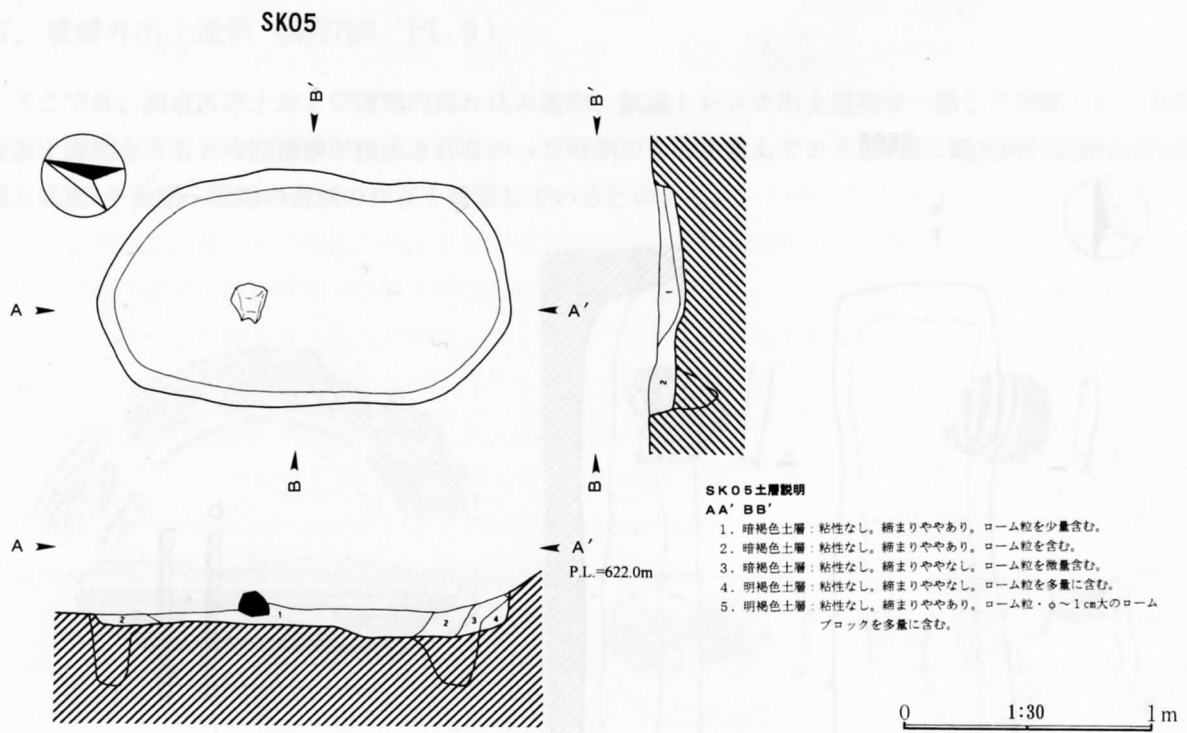
SK04土層説明

AA'

1. 暗褐色土層：粘性なし。締まりあり。ローム粒・軽石を微量含む。
2. 暗褐色土層：粘性なし。締まりあり。ローム粒・軽石を少量含む。
3. 明褐色土層：粘性なし。締まりあり。ローム粒・φ~2cm大のロームブロックを多量に含む。

0 1:30 1 m

第24図 SK01~04実測図 (S = 1/30)



第25図 SK05実測図 (S = 1/30)

覆土 暗褐色土を基調とし、自然堆積を示している。

平面形態と規模 平面形は楕円形を呈し、規模は長軸164cm、短軸88cm、確認面からの深さは7~17cmを測る。

長軸方位 N-22°-W

壁面 やや外傾して垂直気味に立ち上がっている。

床面 凸凹である。

遺物 土器片8点の他、自然礫1点出土しているが図示するには至らなかった。

SK06 (第26図/PL.5・9)

位置 調査区ほぼ中央。

重複関係 SI05と重複しこれを切っている。

遺存状態 良好。

覆土 暗褐色土を基調とし、自然堆積を示している。

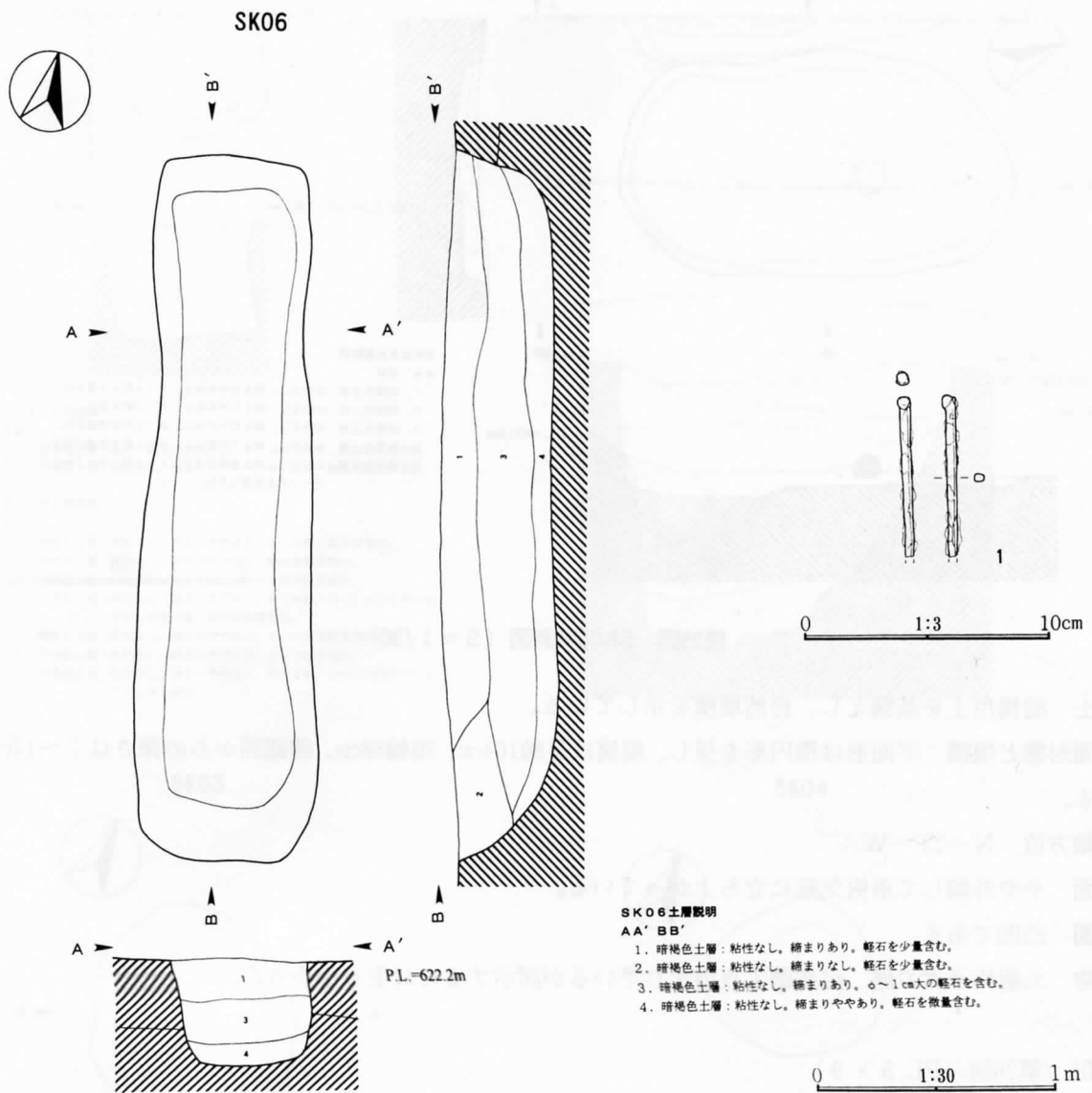
平面形態と規模 平面形は隅丸長方形を呈し、長軸292cm、短軸59cm、確認面からの深さ45cmを測る。

長軸方位 N-12°-W

壁面 やや外傾して立ち上がっている。

床面 ほぼ平坦である。

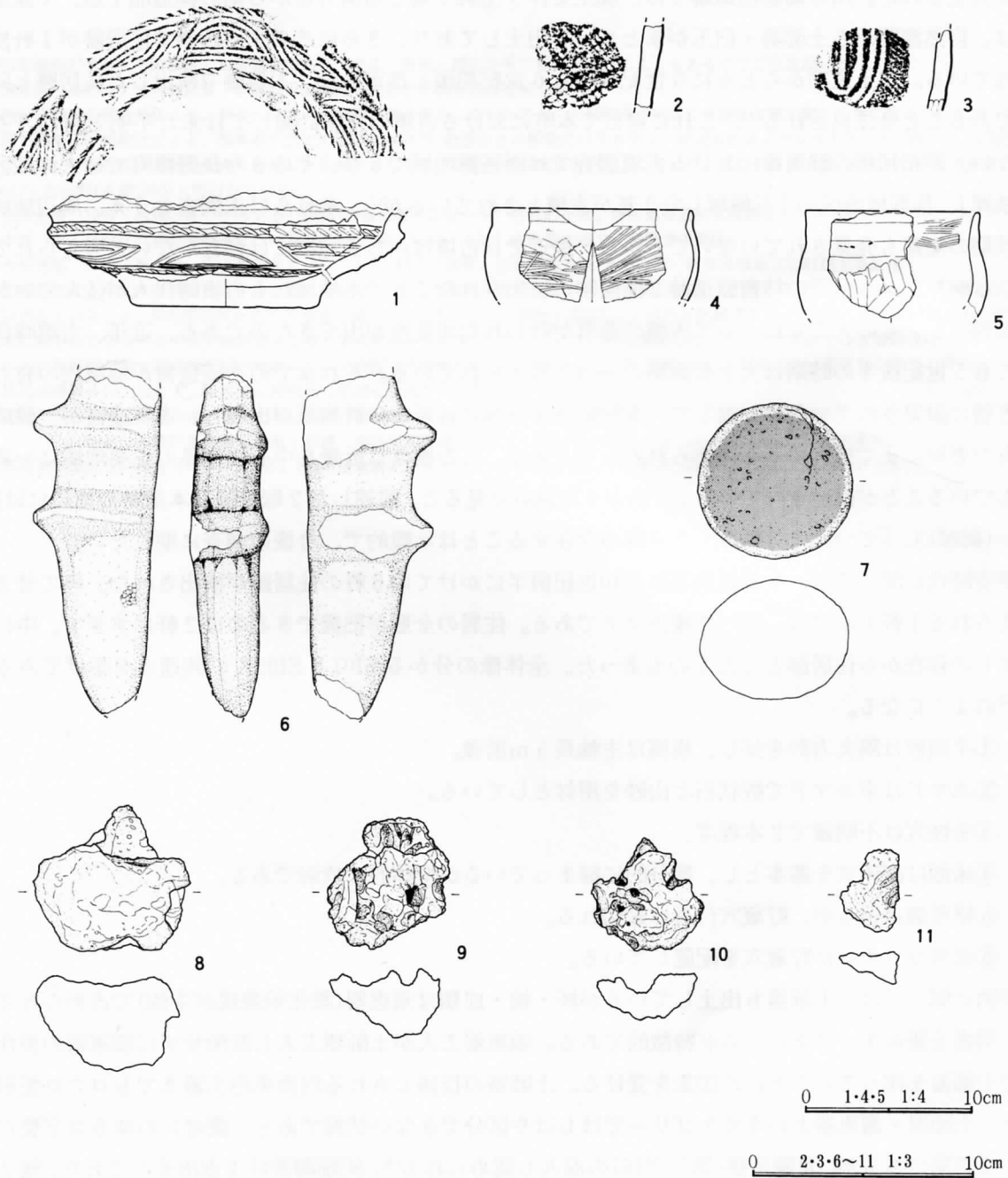
遺物 鉄釘が1点出土している(第26図1)。



第26図 SK06・出土遺物実測図 (S = 1/30・1/3)

3. 遺構外出土遺物 (第27図/PL. 9)

ここでは、調査区表土および遺構内流れ込み遺物、試掘トレンチ出土遺物を一括して掲載した。遺構外出土遺物をみると今回遺構が検出されなかった時期のものを含んでおり、周辺に縄文時代前期後葉(諸磯b式期)や後期～晩期の遺構の存在を暗示しているといえる。



第27図 遺構外出土遺物実測図 (S = 1/4 · 1/3)

第IV章 ま と め

今回の調査は個人専用住宅の建設ということで僅か205m²の調査面積であったが、古墳時代後期住居跡1軒、平安時代住居跡6軒(建て替え1軒含む)、土坑6基(陥穴2基含む)が検出された。

特に古墳時代後期の遺物はこれまで遺構外出土遺物では散見されたが、住居跡の検出は西吾妻地域では初例となる。第II章でも触れたが、この発見に続いて平成16年度には2遺跡で古墳時代の遺構が相次いで発見された。川原湯勝沼遺跡では、焼土を伴う土坑1基と遺構外ながら剣形模造品1点、下原遺跡では、自然流路から土師器・白玉がまとまって出土しており、さらにそのすぐ西側で住居跡が1軒検出されている。出土遺物からともに5世紀末から6世紀初頭と推定され、本遺跡で検出した住居跡と同時期であることは注目される⁽¹⁾。これに対して本町における古墳の有無に関しては未だ不明と言わざるを得ない。昭和10年の群馬県における古墳調査では西吾妻地域で6基、そのうち長野原町では大津地区の「鉄塚」、与喜屋地区の「五輪塚」の2基が古墳とされているが⁽²⁾、それらは未調査なうえ、周辺地域では該期の集落も発見されていないことから、最近では古墳は西吾妻地域には存在しないと考えられていた。しかしながら今回の林宮原遺跡で住居跡が検出されたことで本地域にも古墳時代人が住んでいたことが判明し、その人たちによって古墳の造営が行われた可能性が出てきたのである。近年、古墳時代の中でも5世紀後半の時期は大きな画期の一つと考えられている。それまでの古墳造営が地域内の有力支配者層に限定されていたのに対して、5世紀後半以降には新たに群集墳が出現し、古墳造営が一般成員の有力者層にまで拡大すると考えられるからである。この動きは近畿を中心に列島の主要地域に一斉に及んでいることが確認されている。このような視点で見ると、前述した2塚の他に本遺跡の周辺には「おつか(御塚)」、「てつか」、「砂塚」と3塚が存在することは示唆的で、今後の調査に期したい。

平安時代に関しては、9世紀後葉から10世紀前半にかけての6軒の住居跡が検出された。建て替えと考えられる1軒を除けば、すべて東カマドである。住居の全形が把握できるのは2軒にすぎず、中にはカマドの存在から住居跡としたものもあった。全体像の分かるSI01とSI05Aの共通点を挙げてみると以下のようなになる。

- ①平面形は隅丸方形を呈し、規模は主軸長5m前後。
- ②カマドは東カマドで板状石と山砂を用材としている。
- ③支柱穴は不明確で2本程度。
- ④床面は直床式を基本とし、部分的に締まっているが全体的に軟弱である。
- ⑤壁周溝は巡るが、貯蔵穴付近は途切れる。
- ⑥南東コーナーに貯蔵穴を配置している。

遺物に関しては、土師器も出土しているが杯・椀・皿類は須恵器(酸化焰焼成が主体)で占められており、墨書土器が多く含まれるのが特徴的である。須恵器工人が土師器工人と接触せずに須恵器の製作技法で土師器を作っているという印象を受ける。土師器の技法とされる内面黒色土器までもロクロ整形であり、土師器・須恵器というカテゴリーではもはや区分できない状況である。甕はいわゆるコ字甕が盛行する時期であるが、北陸系甕(第20図16)の混入も認められる⁽³⁾。灰釉陶器は4点出土しており、椀2点を掲載し得たが、岐阜県の東濃、光ヶ丘1号窯式(第17図2)、大原2号窯式(第14図1)の製品が運び込まれている。羽釜はこれまで楡木II遺跡で吉井型・月夜野型が住居跡を違えて出土しており⁽⁴⁾両型が混じ

る地域であることが判明しているが⁶⁾、本遺跡出土の羽釜は2点とも月夜野型と考えられる。その他、鉄製紡錘車の紡輪部、鉄製工具などの鉄製品と鉄滓が住居から伴出しており、集落内で小鍛冶を行っていたことが推測される。

最後に出土遺物から住居跡の新旧関係を示しておきたい。これまでの北毛地域の該期編年観⁶⁾で見ると、SI06(9世紀第3四半世紀)→SI01・04・05AB(9世紀第4四半世紀)→SI03(10世紀第2四半世紀)となり、調査で確認できた重複関係と矛盾しない。近年、該期集落の調査例も増えつつあり、今後は本地域の遺構・遺物の詳細な特徴もより鮮明となっていくであろう。

註

1. 川原湯勝沼遺跡・下原遺跡とも未報告であり、今後、整理・報告段階で見解が変わることもあるのでご注意願いたい。
2. 群馬県 1943『上毛古墳綜覧—群馬県史蹟名勝天然記念物調査報告書第5輯—』
3. 神谷佳明氏の御教示による。神谷氏には出土遺物全般を実見していただき、灰釉陶器の同定や全体的な編年観を丁寧に教えていただいた。
4. 麻生敏隆氏の御教示による。群馬県内出土の羽釜には器形・整形などの特徴にバラエティーが見られることから大きく3つの「型」が設定されている。その分布は地理的条件を考慮した区分である東毛・北毛・西毛地域を中心としており、それぞれ東毛型(桜岡1997)・月夜野型(中沢1984)・吉井型(木津1990)と呼ばれている。
桜岡正信 1997「地域の違いを考える」『最新情報展展示レポート 古代の土器』群馬県埋蔵文化財調査センター
中沢 悟 1984「月夜野型羽釜について」『埋文月報』No.40 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
木津博明 1990「第6項 吉井型羽釜について」『上野国分僧寺・尼寺中間地域(4)』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
5. 桜岡正信氏は月夜野型羽釜と吉井型羽釜の分布について、吾妻川を境界としている(桜岡1997)。その後、桜岡氏は吉井型羽釜が比較的広範囲に分布していること、東毛型羽釜が吉井型羽釜と補完的に分布している状況を確認し、これらと比較すれば、吾妻川と利根川合流点から北側の地域に限定して分布する月夜野型羽釜は上野北部地域に小文化圏を形成していることを指摘した。またその背景には古墳時代にすでに形成されていた地域圏が律令制地域支配の弛緩していく過程で再度鮮明化したものとしている(桜岡2003)。現時点では吾妻川右岸での月夜野型羽釜の検出は確認されておらず、基本的に桜岡氏の見解に賛同する分布を示している。
桜岡正信 1997「地域の違いを考える」『最新情報展展示レポート 古代の土器』群馬県埋蔵文化財調査センター
2003「月夜野型羽釜の生産と流通—地域限定流通の背景—」『研究紀要21』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
6. 群馬県埋蔵文化財調査センター 1997『最新情報展展示レポート 古代の土器』に準拠し、詳細は神谷氏の御教示による。

S104出土遺物観察表

挿図No.	器種	法重(器高/口径/底径)(cm)	特微(形態・手法等)	焼成	胎土・材質等	色調(外面/内面)	備考
16-1	須恵器・壺	(3.7)/-/—	ロクロ整形。受口状を呈し僅かに内傾する。軟質。内外面とも回転子で調整。口縁部内面上端に残り凹線あり。	還元焰 酸化物気味	砂礫	灰白	破片資料(口縁部) 覆土
16-2	灰釉陶器・碗	(2.4)/-/—	ロクロ整形。口縁部は強く外反し体部は直線的。内外面に施釉(刷毛掛け)。器厚薄手。	還元焰	—	灰	破片資料(口縁部~体部)光ヶ丘1号窯式 覆土
16-3	須恵器・壺	(5.3)/-/—	外面は吹き整形。内面は現状当て目残る。	還元焰	砂礫	褐色/灰	破片資料(体部) 覆土
16-4	鉄滓	長5.4/幅4.6/厚1.9	重量47g。碗形滓。	—	—	—	覆土
16-5	鉄滓	長4.7/幅2.9/厚1.0	重量9g。鍛治滓。	—	—	—	覆土

S105AB出土土器観察表

挿図No.	器種	法重(器高/口径/底径)(cm)	特微(形態・手法等)	焼成	胎土・材質等	色調(外面/内面)	備考
20-1	須恵器・碗	5.4/ <15.1>/7.8	右回転ロクロ整形。口縁部は僅かに外反し体部は緩やかな丸みを帯びるもほぼ直線的に開く。高台は短く大きく開く。内面はロクロ痕非常に弱く平滑。右回時に「心？」の墨書あり。貼付時周縁ナテ。内外底面に「皆？」の墨書あり。	還元焰	砂礫	灰	体部30%、底部50%残存。墨書土器。カマド
20-2	須恵器・碗	5.8/ <15.7>/7.0	右回転ロクロ整形。口縁部は僅かに外反し緩やかな丸みを帯びる。高台は短く直立底面に開く。内面はロクロ痕非常に弱く平滑。右回時に「皆？」の墨書あり。	還元焰 酸化物気味	角閃石・小石	灰/黄灰	底部完存、体部20%残存。墨書土器。 覆土
20-3	須恵器・杯	(4.2)/ <15.2>/—	右回転ロクロ整形。口縁部は外反し緩やかな丸みを帯びる。内面はロクロ痕非常に弱く平滑。	還元焰	小石	灰黄	体部45%残存。 覆土
20-4	須恵器・杯	(4.2)/ <13.2>/—	右回転ロクロ整形。口縁部は外反し緩やかな丸みを帯びる。内面はロクロ痕非常に弱く平滑。	還元焰	小石	黄灰/灰白	体部15%残存。 覆土
20-5	須恵器・杯	3.7/ <13.2>/ <5.0>	右回転ロクロ整形。口縁部は強く外反し体部下半に丸みを帯びる。内面はロクロ痕非常に弱く平滑。器厚薄手。	還元焰	小石	灰	体部15%残存。 覆土
20-6	須恵器・杯	(4.4)/ <14.2>/—	右回転ロクロ整形。口縁部は外反し体部下半に丸みを帯びる。内面はロクロ痕非常に弱く平滑。	還元焰 酸化物気味	砂礫	灰	体部25%残存。 貯蔵穴
20-7	須恵器・杯	(3.5)/ <15.0>/—	右回転ロクロ整形。口縁部は僅かに外反し体部直線的に開く。内面はロクロ痕弱く。体部外面に墨書あり。	還元焰 酸化物気味	小石	灰	体部20%残存。墨書土器。 覆土
20-8	須恵器・杯	(4.8)/ <15.6>/—	右回転ロクロ整形。口縁部は僅かに外反し体部は丸みを帯びる。内外面はロクロ痕非常に弱く平滑。体部内部に墨書あり。	還元焰 酸化物気味	石英・雲母	灰白	体部20%残存。墨書土器。 P2
20-9	須恵器・杯	3.6/ <13.8>/ <7.4>	右回転ロクロ整形。口縁部は外反し体部は丸みを帯びる。内面はロクロ痕非常に弱く平滑。見込み部明瞭。底部は回転糸切りで外面に「原？」の墨書あり。	還元焰 酸化物気味	褐色粒	浅黄褐色	体部25%残存。墨書土器。岐阜系？ 覆土
20-10	須恵器・杯	3.3/ <13.6>/ <7.8>	右回転ロクロ整形。口縁部は僅かに外反し体部は丸みを帯びる。内面はロクロ痕非常に弱く平滑。見込み部明瞭。底部は回転糸切り。底面外面に自然釉付着。	還元焰	—	灰	15%残存。 貯蔵穴
20-11	須恵器・皿	1.7/ <13.2>/ <7.2>	右回転ロクロ整形。口縁部と体部が一体化して外反し開く。高台は三日月状で直立する。内面はロクロ痕非常に弱く平滑。高台は回転糸切り後に貼付。貼付時に周縁ナテで指頭残す。	還元焰	石英	灰	25%残存。 覆土
20-12	須恵器・杯	(2.4)/-/—	ロクロ整形。口縁部は外反し、体部は緩やかに丸みを帯びる。口縁部内面に墨書あり。	還元焰	白色粒	灰	破片資料(口縁部~体部) 墨書土器。 覆土
20-13	須恵器・杯	(1.8)/-/—	ロクロ整形。緩やかに内彎しながら開く口縁部。内外面に墨書あり。	還元焰 酸化物気味	石英	灰/にぶい橙	破片資料(口縁部) 墨書土器。 覆土
20-14	須恵器・杯	(2.0)/-/—	ロクロ整形。体部は緩やかに丸みを帯びる。底部は回転糸切り。体部外面に墨書あり。	還元焰 酸化物気味	—	灰黄褐色/褐色	破片資料(体部下半~底部) 墨書土器。 覆土
20-15	碗	5.1/ <15.4>/7.8	右回転ロクロ整形。内黒土器。口縁部は僅かに外反し体部は緩やかな丸みを帯びるもほぼ直線的に開く。高台は短く大きく開く。内面はロクロ痕非常に弱く平滑で黒色処理を施している。高台は回転糸切り後貼付。貼付時に周縁ナテ。体部外面に「皆？」の墨書あり。	還元焰 酸化物気味	角閃石・砂礫	にぶい、黄褐色/黒褐色	底部完存、体部5%残存。 覆土
20-16	土師器・壺	(11.7)/ <13.8>/—	小形。右付壁か。口縁部外反し頸部はく字状に屈曲する。肩部に磨大径をもつ。口縁部内外面とも横位ヘラナテ。胴部外面は横位ヘラナテで削り。胴部内面は横位ヘラナテを主とする。内外面に煤の付着あり。	還元焰	角閃石	橙	口縁部~胴部20%残存。北陸系。 覆土
20-17	土師器・壺	(8.3)/-/—	コ字口縁部。口縁部は丸みを帯びて外傾。下位は僅かに外傾気味に直立する。肩部の張りはやや強い。口縁部横ナテ強く頸部で凹線状となる。口縁部内外面とも横位ヘラナテ調整。胴部外面は斜位ヘラナテ削り調整後に横位ヘラナテ。	還元焰	砂礫	橙/黄褐色	破片資料(口縁部~胴上部) 覆土
20-18	鉄滓	長5.0/幅3.3/厚1.9	重量47g。流動滓。	—	—	—	覆土
20-19	鉄滓	長2.7/幅2.1/厚1.4	重量28g。鍛治滓。	—	—	—	覆土
20-20	磨石	長3.4/幅3.2/厚2.4	重量34g。円形。	—	石英	—	覆土
20-21	須恵器・杯	4.7/13.5/7.1	右回転ロクロ整形。口縁部は僅かに外反し体部は丸みを帯びる。内面はロクロ痕非常に弱く平滑。体部外面に自然釉付着。	還元焰	砂礫	青灰	体部60%残存。底部完存。カマド
20-22	須恵器・杯	(3.8)/ <13.5>/—	右回転ロクロ整形。口縁部は僅かに外反し体部は丸みを帯びる。内面はロクロ痕非常に弱く平滑。体部外面に自然釉付着。	還元焰	小石	灰	体部25%残存。 カマド

SI06出土遺物観察表

種別	図版No.	器種	法量(器高/口径/底径)(cm)	特 徴 (形態・手法等)	焼成	胎土・材質等	色調 (外面/内面)	備 考
23-1	9	須臾器・杯	3.5/ <14.8>/ <7.6>	右回転コトクロ整形。口縁部は体部と一体化し直線的に開く。内面はロクコロ痕やや明瞭。底部は回転糸切り。	還元焰	砂礫	灰	20%残存。
23-2	9	須臾器・杯	3.8/13.2/6.8	右回転コトクロ整形。口縁部は外反し体部は緩やかな丸みを帯びる。内面はロクコロ痕非常に強く平滑、見込み部やや明瞭。底部は回転糸切り。体部外面に「王」の墨書あり。	還元焰	石英・砂礫	灰	完存。墨書土器。
23-3	9	須臾器・碗	5.1/15.0/6.8	右回転コトクロ整形。口縁部は外反し体部は緩やかな丸みを帯びる。内面はロクコロ痕非常に強く平滑、見込み部やや明瞭。高台は回転糸切り後貼付。体部外面に「十一」の墨書あり。	還元焰	小石	灰白	95%残存。墨書土器。
23-4	9	須臾器・杯	3.9/13.4/7.2	右回転コトクロ整形。口縁部は外反し体部は緩やかな丸みを帯びる。内面はロクコロ痕非常に強く平滑、見込み部やや明瞭。底部は回転糸切り。器面全体に火タスキ状の包ムス状の墨書あり。内底面に「東」の墨書あり。	還元焰	小石	灰	95%残存。墨書土器。
23-5	9	須臾器・碗	(1.8)/-/6.6	ロクコロ整形。高台は短く大きく開く。回転糸切り後に貼付。貼付時周縁ナデ。外底面に墨書あるが判読不明。	還元焰	角閃石	灰白	高台部50%残存。墨書土器。
23-6	9	須臾器・碗	(2.0)/-/8.0	ロクコロ整形。高台は短く大きく開く。回転糸切り後に貼付。貼付時周縁ナデ。内底面に墨書あるが判読不明。	還元焰	角閃石	灰白	高台部70%残存。墨書土器。
23-7	9	土師器・壺	(4.7)/-/—	コ字口縁部。口縁部上位は外反し、下位は僅かに内傾気味に直立する。外面には輪郭痕、指痕残す。内面は横位ヘラナデ。	酸火焰	角閃石	橙	破片資料(口縁部)

SK06出土遺物観察表

種別	図版No.	器種	法量(器高/口径/底径)(cm)	特 徴 (形態・手法等)	焼成	胎土・材質等	色調 (外面/内面)	備 考
26-1	9	鉄製品・釘	長(6.7)/幅(0.4)/皿部幅(0.6)/厚(0.3)	重量5g。断面隅丸方形。下端欠損。	—	—	—	下端欠損。

遺構外出土遺物観察表

種別	図版No.	器種	法量(器高/口径/底径)(cm)	特 徴 (形態・手法等)	焼成	胎土・材質等	色調 (外面/内面)	備 考
27-1	9	浅鉢	(6.4)/ <21.3>/ <11.3>	胴部外面に有刻浮線文区画の分離木の葉文(平行浮線)。内面は横位ヘラミガキを主とする。	良好	角閃石・長石	暗褐	破片資料(胴部~底部) 諸磯b式
27-2	9	深鉢	(3.8)/-/—	外面はLR・RL単斜細文を縦位に施文。内面は横位ナデ。	良好	小石	にぶい黄褐	破片資料(胴部) 諸磯式
27-3	9	深鉢	(3.5)/-/—	外面はLR単斜細文上にヘラ描弧状浮線を施文。内面は横位ナデ。	良好	砂礫	橙	破片資料(胴部) 加曽利E式
27-4	9	土師器・小形壺	(5.6)/ <11.9>/—	口縁部は僅かに短く外反するが直立気味に開く。胴部は丸く膨らむ。口縁部内外面は横位ナデ。胴部外面は斜位ヘラナデ。胴部内面は横位ナデ後に斜位ミガキ。器厚薄手。	酸化焰	角閃石	明赤褐	胴部10%残存。
27-5	9	土師器・小形壺	(6.2)/ <10.5>/—	口縁部は僅かに外反するが直立気味に開く。胴部は丸く膨らむ。口縁部外面は横位ナデ、胴部内面は斜位ヘラナデ。口縁部内面は横位ヘラナデ。器厚厚手。	酸化焰	角閃石・雲母	橙/褐	口縁部~胴部15%残存。
27-6	9	須臾石	長(14.8)/幅(5.4)/厚(2.9)	重量327g。磨製。両端欠損。	—	ひん岩	—	両端欠損。 SI03・04覆土
27-7	9	磨石	長(6.8)/幅(6.7)/厚(5.7)	重量322g。円形。	—	粗粒輝石安山岩	—	完存。
27-8	9	鉄滓	長(6.2)/幅(6.9)/厚(3.8)	重量197g。板形薄。	—	—	—	完存。東壁
27-9	9	鉄滓	長(5.2)/幅(5.1)/厚(3.0)	重量56g。板形薄。	—	—	—	完存。東壁
27-10	9	鉄滓	長(4.9)/幅(5.1)/厚(1.9)	重量63g。板形薄。	—	—	—	完存。東壁
27-11	9	鉄滓	長(3.6)/幅(2.6)/厚(0.9)	重量12g。板形薄。	—	—	—	50%残存。東壁

写 真 图 版



1.遺跡全景（東側より）



2.遺跡近景①（西側より）



3.遺跡近景②（南側より）



4.遺跡近景③（北側より）



5.SI01・SI02（南西側より）



6.SI01（西側より）



7.SI01カマド検出状況①（南側より）



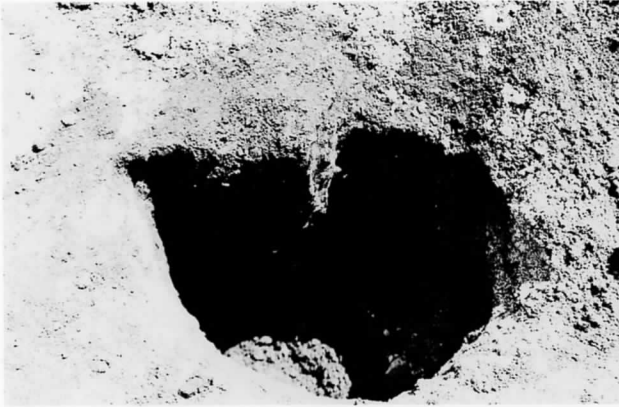
8.SI01カマド検出状況②（西側より）



1.SI01カマド半截状況（西側より）



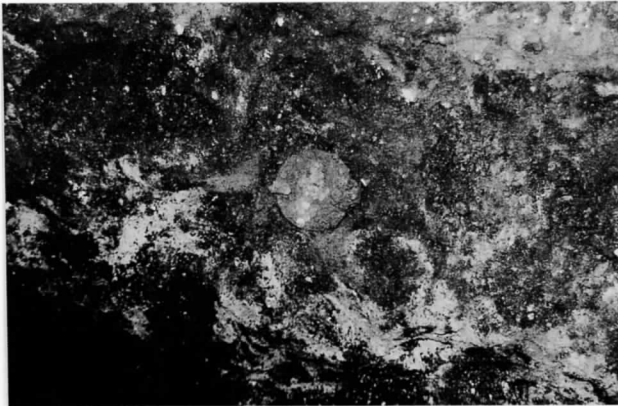
2.SI01カマド完堀状況（西側より）



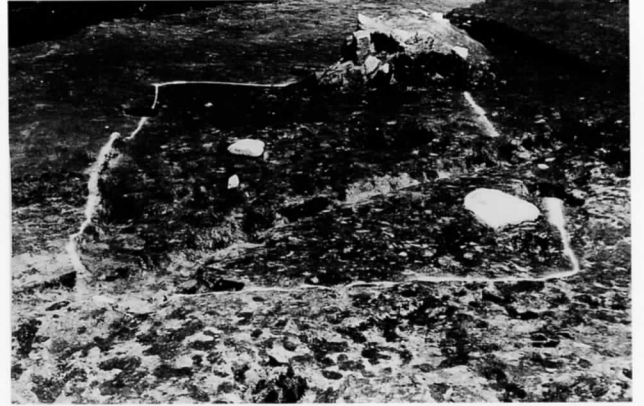
3.SI01貯蔵穴（北西側より）



4.SI01遺物出土状況①



5.SI01遺物出土状況②



6.SI02（南西側より）



7.SI02カマド半截状況①（南西側より）



8.SI02カマド半截状況②（南西側より）



1.SI02遺物出土状況



2.SI03 (西側より)



3.SI03カマド半截状況① (西側より)



4.SI03カマド半截状況② (西側より)



5.SI03カマド半截状況③ (南西側より)



6.SI04カマド半截状況① (南側より)



7.SI04カマド半截状況② (南側より)



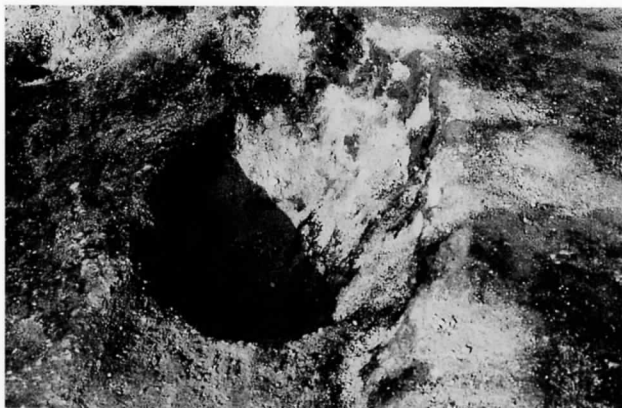
8.SI04カマド完掘状況 (南西側より)



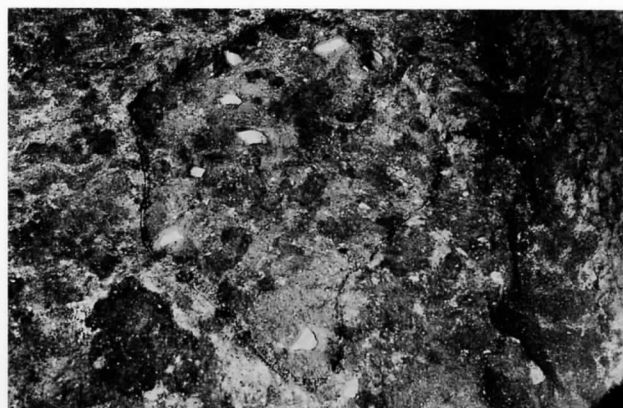
1.SI05 (南側より)



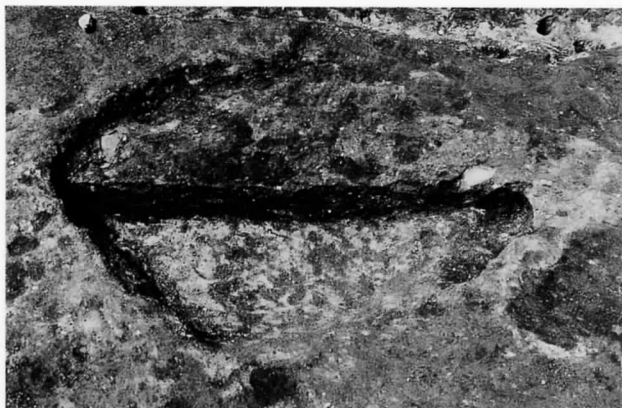
2.SI05Bカマド (西側より)



3.SI05貯蔵穴 (南西側より)



4.SI05Aカマド検出状況 (南西側より)



5.SI05Bカマド半截状況 (西側より)



6.SI06 (東南側より)



7.SI06掘り方 (東南側より)



8.SI06カマド半截状況 (東側より)



1.SI06カマド (東側より)



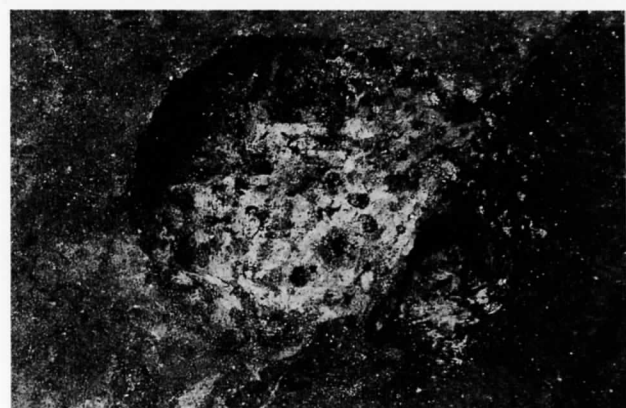
2.SI06遺物出土状況



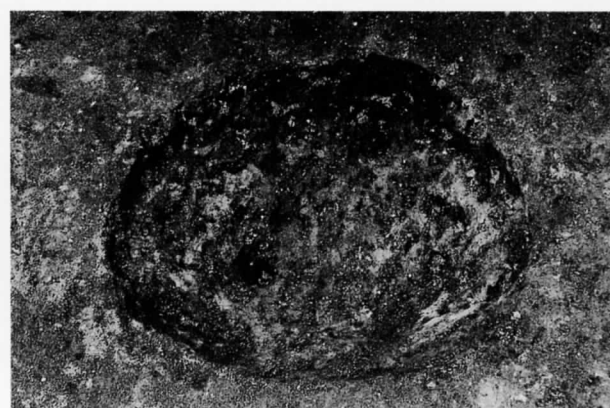
3.SK01 (西側より)



4.SK02 (西側より)



5.SK03 (南西側より)



6.SK04 (南西側より)



7.SK05 (東南側より)



8.SK06 (東南側より)



1.社会科学習①



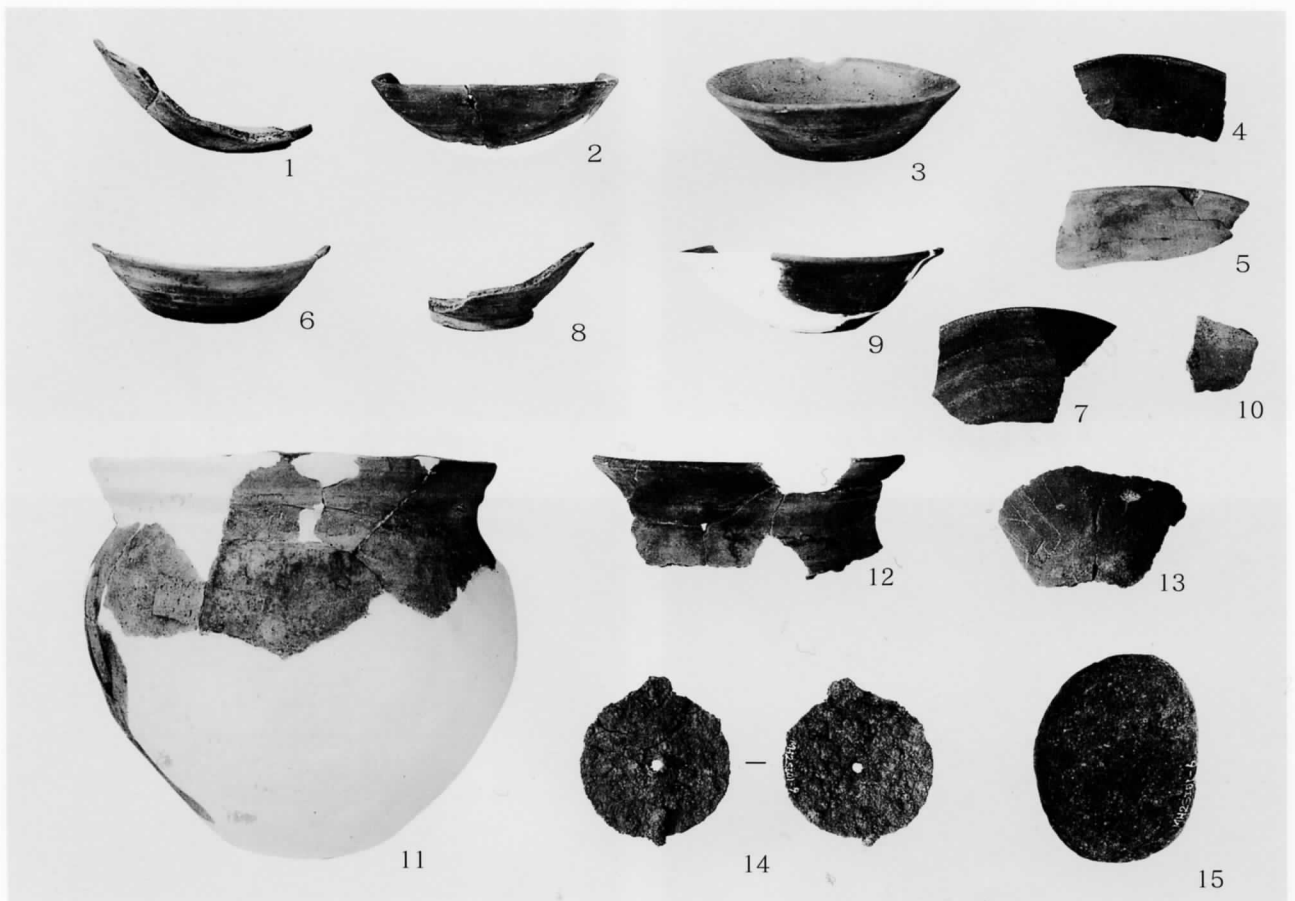
2.社会科学習②



3.調査風景 (東側より)



4.てつか



5.SI01出土遺物



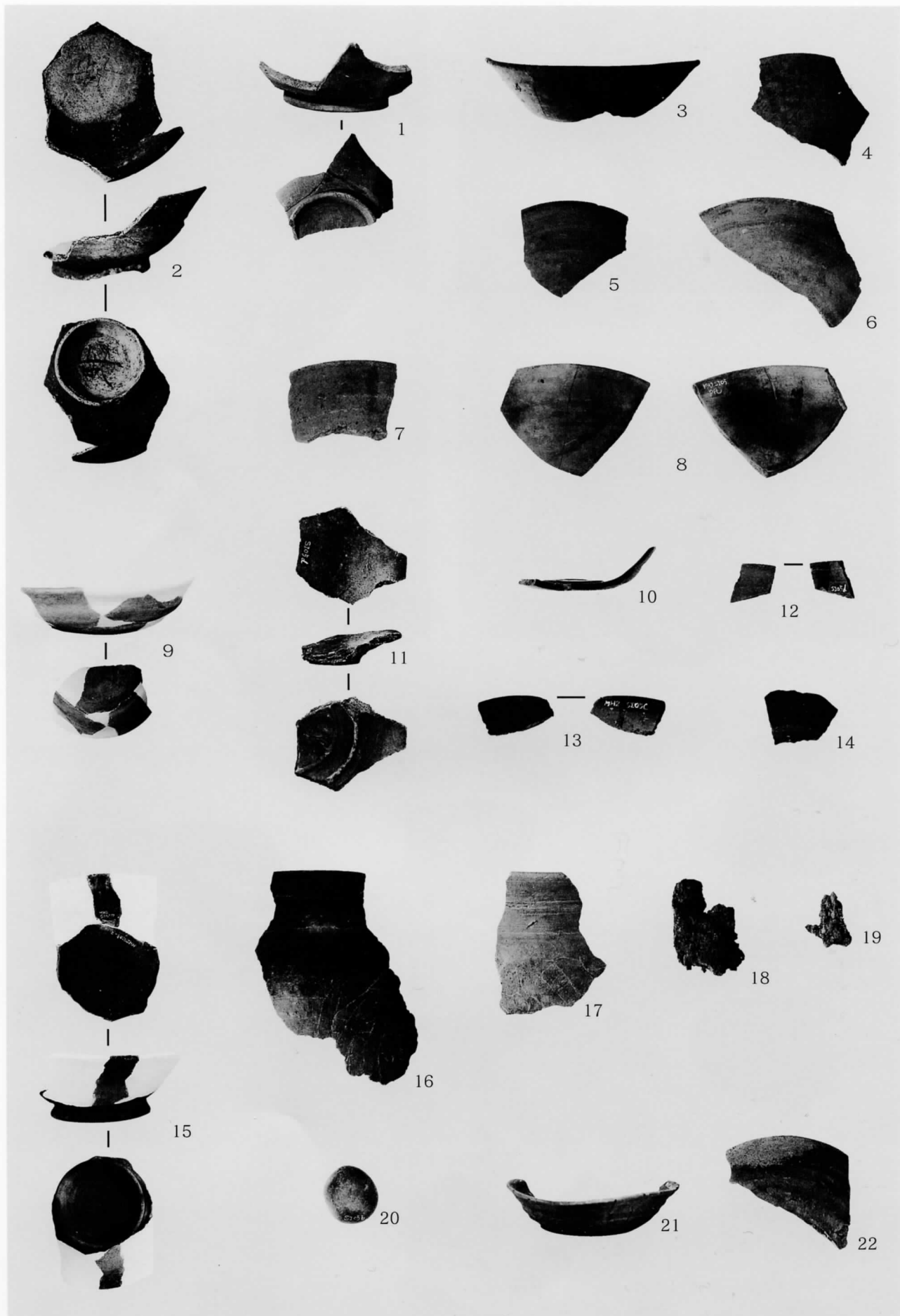
1.SI02出土遺物



2.SI03出土遺物



3.SI04出土遺物



SI05出土遺物



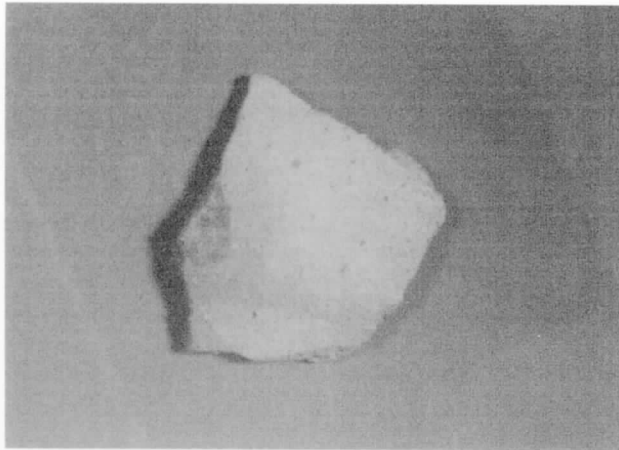
1.SI06出土遺物



2.SK06出土遺物



3.遺構外出土遺物



第9図10



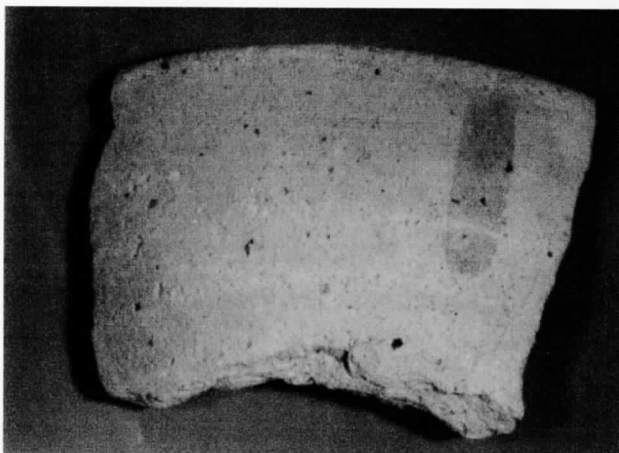
第20図1



第20図2 (内底面)



第20図2 (外底面)



第20図7



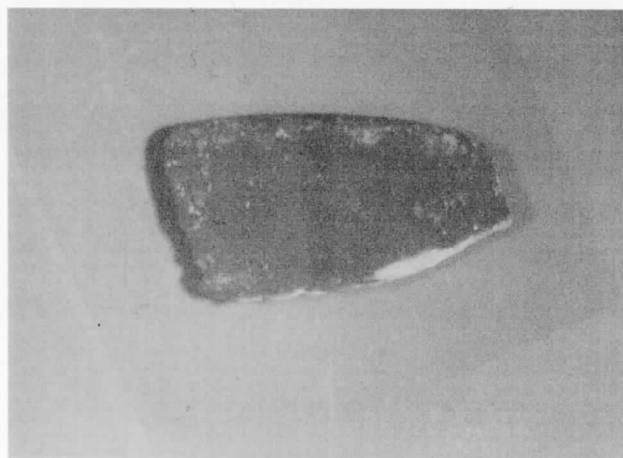
第20図8



第20図9



第20図12



第20図13 (外面)



第20図13 (内面)



第20図14



第23図2



第23図3



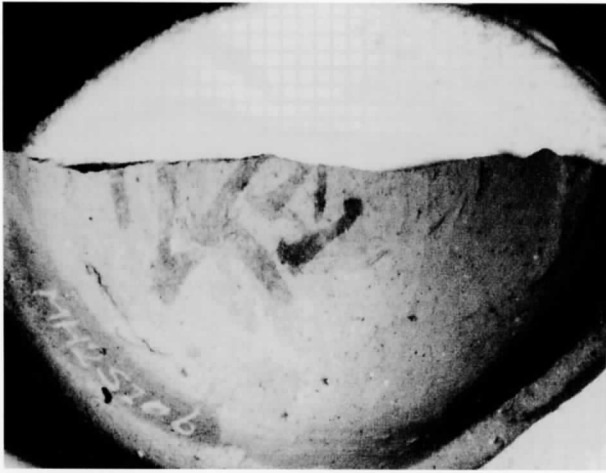
第23図4 (体部外面)



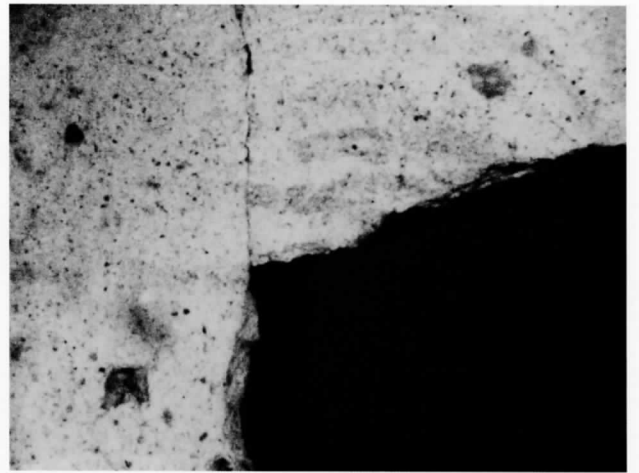
第23図7 (体部内面)



第23図4 (内底面)



第23図5



第23図6

墨書土器赤外線写真③



報告書抄録

ふりがな	はやしみやはらいせき に							
書名	林宮原遺跡Ⅱ							
副書名	— 個人専用住宅建設に伴う発掘調査報告書 —							
巻次								
シリーズ名	長野原町埋蔵文化財調査報告							
シリーズ番号	第14集							
編著者名	富田孝彦							
編集機関	長野原町教育委員会							
所在地	〒377-1305 群馬県吾妻郡長野原町大字与喜屋174 TEL 0279-82-4517							
発行年月日	西暦2004年11月30日							
ふりがな 所収遺跡名	フリガナ 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
はやしみやはらいせき 林宮原	ナガノハラマチオオアザ 長野原町大字 ハヤシアザミヤハラ 林字宮原545-4他	10424	48	36° 32' 27"	138° 40' 37"	030417~ 030509	205㎡	個人専用住宅
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
林宮原	集落跡	古墳時代 平安時代 時期不明	竪穴式住居 住居跡 土坑	1軒 6軒 6基	縄文土器、石器、土師器、須恵器、灰釉陶器、鉄製品、鉄滓など		西吾妻地域で古墳時代後期住居跡を初検出	

林宮原遺跡Ⅱ

平成16年11月26日 印刷

平成16年11月30日 発行

発行 群馬県吾妻郡長野原町教育委員会

〒377-1305 群馬県吾妻郡長野原町大字与喜屋174

TEL 0279 (82) 4517 FAX 0279 (82) 4519

印刷 朝日印刷工業株式会社





